岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第458集

本宮熊堂（もとみやくまどう）B遺跡第18次発掘調査報告書

国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

本宮熊堂（もとみやくまどう）B遺跡第18次発掘調査報告書

国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道46号盛岡西バイパス建設事業に関連して平成15年度に行った本宮熊堂Ｂ遺跡第18次調査の成果をまとめたものであります。この調査により段丘上に立地する縄文～古代にかけての集落の様子がこれまで以上に明らかになり、当時の集落を考えるうえで貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年１月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長　合　田　　武

例　言

1．本書は、岩手県盛岡市本宮字熊堂45－１ほかに所在する本宮熊堂Ｂ遺跡第18次発掘調査の成果を収録したものである。

2．調査は、国道46号盛岡西バイパス建設事業に伴い、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。

3．本宮熊堂Ｂ遺跡は岩手県遺跡登録台帳番号ＬＥ16－2118、第18次調査の調査略号はＯＫＯ－03－18である。

4．発掘調査面積は5,118㎡、発掘調査期間は平成15年４月11日～６月30日、同年９月18日～10月８日である。発掘調査は、福島正和・吉田　充・野中真盛・齋藤麻紀子が担当した。

5．発掘調査に際する基準点、補助点の測量・設置は、株式会社吉田測量設計に業務委託した。

6．整理作業は平成15年12月１日～平成16年３月31日の期間、齋藤麻紀子が担当した。

7．本書の執筆および編集は、野中真盛・齋藤麻紀子の協力を得て福島正和・吉田　充がおこなった。

8．発掘調査においては、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、地域振興整備公団岩手総合開発事務所のご協力をいただいた。

9．石質鑑定は化崗岩研究会に委託した。

10．調査および報告書作成にあたり、以下の方々のご教示をいただいた。（敬称略・順不同）
鎌田　勉（岩手県教育委員会）、八木光則、津島知弘、三浦陽一、今野公顕（盛岡市教育委員会）

11．本書では、国土地理院発行「盛岡・日詰　１：50,000」地図を使用した。

12．検出遺構の土層注記における土色および出土土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版　標準土色帖』2002年度版に準拠した。

13．調査で出土した遺物および実測図、写真等の各種記録類の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

14．本書発行以前に現地説明会で資料および調査成果を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業期間を経ている本書をもって正とする。

目　次

序
例言

＜本　文＞

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
　1．地理的環境 …… 1
　2．歴史的環境 …… 5
Ⅲ．調査の方法 …… 9
　1．発掘調査の方法 …… 9
　2．整理作業の方法 …… 9
　3．記載方法と凡例 …… 10
Ⅳ．検出遺構と出土遺物 …… 11
　1．基本層序と遺構配置 …… 11
　2．Ⅰ区の遺構と遺物 …… 12
　3．Ⅱ区の遺構と遺物 …… 21
　4．Ⅲ区の遺構と遺物 …… 28
　5．Ⅳ区の遺構と遺物 …… 45
　6．遺構外出土遺物 …… 55
Ⅴ．調査のまとめ …… 67
　1．縄文～弥生時代 …… 67
　2．奈良～平安時代 …… 67
　3．まとめと今後の課題 …… 68
Ⅵ．考察 …… 69
　平安時代における墓壙 …… 69
　1．はじめに …… 69
　2．墓壙の類例 …… 69
　3．墓壙の特徴と意義 …… 71
　4．まとめ …… 72

＜図　版＞

第1図　遺跡位置 …… 2
第2図　地形分類 …… 3
第3図　周辺の遺跡分布 …… 6
第4図　調査区割 …… 9
第5図　層序断面模式図 …… 11
第6図　遺構配置図 …… 11
第7図　Ⅰ区遺構配置 …… 12
第8図　RD162・163・168・169土坑 …… 13
第9図　Ⅰ区出土遺物（古代以前） …… 14
第10図　RD164・165土坑 …… 17
第11図　RD159・160土坑 …… 19
第12図　RD161・166・157土坑 …… 20
第13図　RD159・167土坑出土遺物 …… 21
第14図　Ⅱ区遺構配置 …… 22
第15図　RA081竪穴住居 …… 23
第16図　RA081竪穴住居出土遺物 …… 24
第17図　RG097溝跡 …… 25
第18図　RG098溝跡 …… 26
第19図　RG097・098溝跡出土遺物 …… 27
第20図　Ⅲ区遺構配置 …… 29
第21図　RA069竪穴住居 …… 31
第22図　RA069竪穴住居カマド …… 32
第23図　RA069竪穴住居出土遺物 …… 33
第24図　RA070竪穴住居 …… 34
第25図　RA070竪穴住居カマド …… 36
第26図　RA070竪穴住居出土遺物 …… 37
第27図　RA071竪穴住居 …… 38
第28図　RA071竪穴住居出土遺物 …… 39
第29図　RG097溝跡 …… 40
第30図　RG098溝跡 …… 41
第31図　RG097・098溝跡出土遺物 …… 42
第32図　RD170土坑 …… 43
第33図　RD171～175土坑 …… 43

第34図　ＲＤ176～182土坑 …… 44
第35図　ＲＤ179・180土坑出土遺物 …… 45
第36図　Ⅳ区遺構配置 …… 46
第37図　ＲＡ072・073竪穴住居
　　ＲＤ183土坑 …… 48
第38図　ＲＡ072・073竪穴住居カマド …… 49
第39図　ＲＡ072・073竪穴住居
　　出土遺物 …… 50
第40図　ＲＤ183土坑出土遺物 …… 50
第41図　ＲＥ012竪穴住居状遺構 …… 51
第42図　ＲＥ013竪穴住居状遺構 …… 52
第43図　ＲＥ012・013竪穴住居状
　　遺構出土遺物 …… 52
第44図　ＲＤ184～186土坑、
　　ＲＺ014その他遺構 …… 54
第45図　ＲＤ184～186土坑、
　　ＲＺ014その他遺構出土遺物 …… 55
第46図　ＲＧ102・124～127溝跡 …… 56
第47図　遺構外出土遺物（古代以前） …… 57
第48図　遺構外出土遺物（古代以前） …… 58
第49図　遺構外出土遺物（古代以降） …… 59
第50図　墓壙類例 …… 70

＜　表　＞

表１　盛岡南新都市計画整備事業
　　関連遺跡一覧 …… 5
表２　周辺遺跡一覧（１）・（２） …… 7
表５　遺物観察表 …… 60

＜写真図版＞

カラー写真　イノシシ形土製品（Ⅰ区カクラン出土）… 73
写真図版１　発掘調査前現況 …… 74
写真図版２　全景 …… 75
写真図版３　ＲＤ162～166土坑 …… 76
写真図版４　ＲＤ168・169土坑 …… 77
写真図版５　ＲＤ159～161土坑 …… 78
写真図版６　Ⅱ区調査前現況・調査風景 …… 79
写真図版７　Ⅱ区全景 …… 80
写真図版８　ＲＡ081竪穴住居跡 …… 81
写真図版９　ＲＡ081竪穴住居跡 …… 82
写真図版10　ＲＧ097・098溝跡（Ⅱ区） …… 83
写真図版11　ＲＧ098溝跡（Ⅱ区） …… 84
写真図版12　ＲＡ069竪穴住居跡 …… 85
写真図版13　ＲＡ069竪穴住居跡 …… 86
写真図版14　ＲＡ070竪穴住居跡 …… 87
写真図版15　ＲＡ070竪穴住居跡 …… 88
写真図版16　ＲＡ071竪穴住居跡 …… 89
写真図版17　ＲＧ097・098溝跡（Ⅲ区） …… 90
写真図版18　ＲＤ167・170・176・177土坑 …… 91
写真図版19　ＲＤ178～181土坑 …… 92
写真図版20　ＲＡ072・073竪穴住居跡 …… 93
写真図版21　ＲＥ012竪穴住居状遺構 …… 94
写真図版22　ＲＥ013竪穴住居状遺構 …… 95
写真図版23　ＲＤ182・184土坑、
　　ＲＺ014性格不明遺構 …… 96
写真図版24　ＲＡ081 …… 97
写真図版24　ＲＡ081 ＲＧ097・ＲＧ098 …… 99
写真図版25　ＲＡ069 ① …… 100
写真図版26　ＲＡ069 ②・ＲＡ070 …… 101
写真図版27　ＲＡ070・ＲＡ071
　　ＲＧ097・ＲＧ098 …… 102
写真図版28　ＲＧ097・ＲＧ098　ＲＤ180
　　ＲＡ072・ＲＡ073 …… 103
写真図版29　ＲＡ072・ＲＡ073
　　ＲＥ012・ＲＥ013　ＲＤ183 … 104

写真図版30　ＲＤ184～ＲＤ186　ＲＺ014 …… 105
写真図版31　ＲＤ184～ＲＤ186
　　ＲＺ014　遺構外 …… 106
写真図版32　遺構外 …… 107
写真図版33　遺構外 …… 108
写真図版34　古代以前 …… 109
写真図版35　古代以前 …… 110

Ⅰ．調査に至る経緯

本宮熊堂Ｂ遺跡第18次調査は、盛岡西バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道46号は、盛岡市を起点に奥羽山脈を仙岩トンネルで越え、国道13号に接続し、秋田市に至る延長約117kmの主要幹線道路であり、盛岡市で一般国道106号と接続することにより、太平洋と日本海を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。

盛岡西バイパスは、盛岡市永井地割字高屋と同市上厨川字前潟の間7.8kmの区間で計画されている。近年の交通の増大と車両の大型化に伴い、年々増大する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和59年度に着手、昭和62年から工事着手、一部供用し事業を進めている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、本宮熊堂Ｂ遺跡も確認されている。本宮熊堂Ｂ遺跡については平成14年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現河川国道事務所）に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について平成15年１月14日付け「教年第1457号」により、財団法人岩手県文化振興事業団に、平成15年３月６日付け「教生1630号」により、岩手工事事務所長へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成15年４月１日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、４月１日から本宮熊堂Ｂ遺跡第18次の発掘調査に着手した。

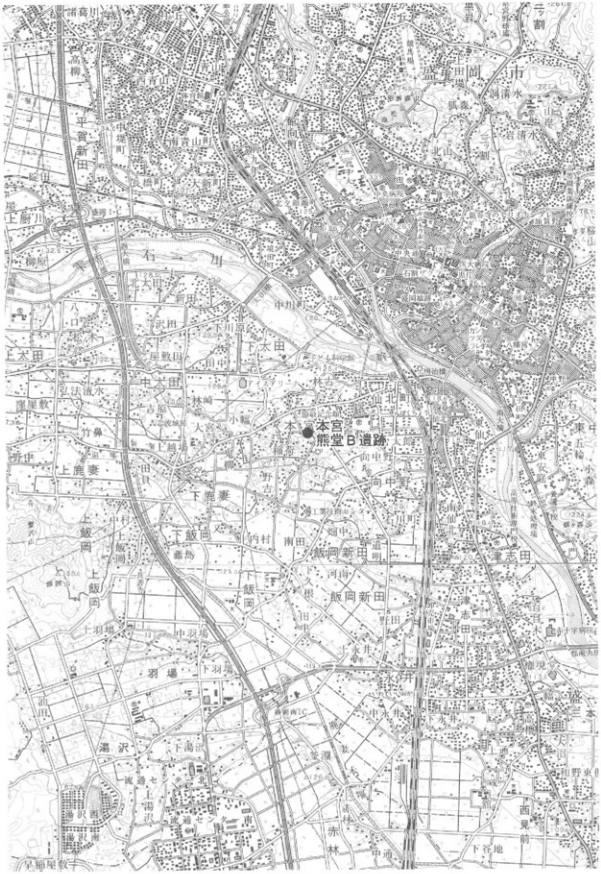
（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

盛岡市は岩手県の県庁所在地で面積489.15k㎡、人口は約28万人である。文化・経済の中心地でもあり、産業面においては第３次産業への従事人口が８割を占め、特にサービス業が大きな割合を占めている。江戸時代は南部藩の城下町で、現在は東北新幹線、東北自動車道、国道などが交差する交通結節点で北東北の玄関口でもある。平成12年に特例市へ移行し、広域圏の周辺市町村とともに総合的・一体的発展をめざしている。隣接山町村は、東側が下閉伊郡岩泉町および川井村、西側が岩手郡雫石町、南側が紫波郡矢巾町と紫波町および稗貫郡大迫町、北側が岩手郡滝沢村および玉山村の５町３村である。

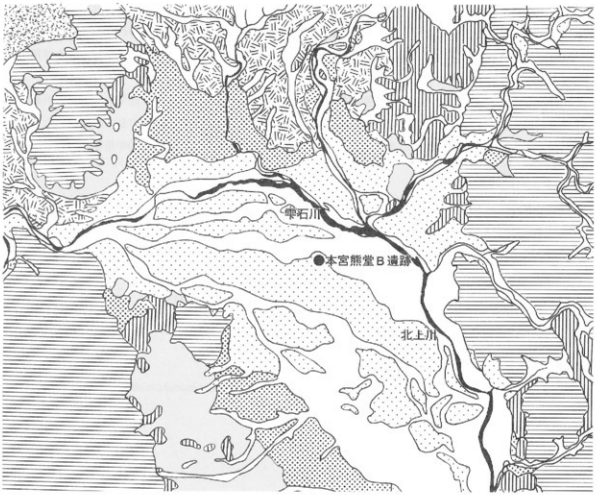
盛岡市街地は北上低地帯に広がり、その東西両側には北上山地と奥羽山脈が低地帯に平行して南北方向に連なる。低地帯内部では北上川が北から南に流れ、これに西から流れる雫石川と東から流れる中津川・雫川が盛岡駅南側で合流する。奥羽山脈東縁では北西側には岩手山（2040.5m）が聳え、ここから南側に標高400m前後の山〔高峰山（415.9m）・烏帽山（389.1m）〕が、さらに御所ダム付近の峡谷部を挟んで800m前後の山（箱ヶ森（865.5m）、赤林山（855m）、毒ヶ森（782m）、南昌山（848m））が連なり、この800m前後の山の前面には丘陵状の地形が広がる。北上山地西縁では北東側に姫神山（1,124.5m）が聳え、ここから南側



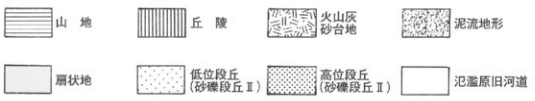
第1図　遺跡位置

に標高700～900m（鳥頭山（709.8m）、明神山（746.2m）など）、550～600mの山（高森山（625.8m）、朝島山（607m）など）が連なる。

北上山地はなだらかな地形を呈し、隆起準平原と考えられている。古生代や中生代の堆積岩（砂岩・粘板岩・凝緑凝灰岩・石灰岩など）および花崗岩から構成され、基盤岩の走向方向に対応して北北西－南南東の地形配列がみられる。北上山地は古い時代の地層が分布する地帯として古くから研究が行われてきた。早池峰構造帯という「断層帯」を挟んで北側に北部北上帯（中生代付加体）と南部北上帯（島弧性地質体）に区分されていたが、最近の研究で断層帯ではなく、独立した地質ユニットとして区分され、「早池峰帯」（古生



S＝1：100,000



第２図　地形分類

代付加体）と呼ばれるようになった。

奥羽山脈は第三系から構成される地域で、北上山地に比し起伏が大きく、急峻な地形を呈するところが多い。岩手山を代表とする第四紀に形成された新規火山地域と、新第三系の珪質・火山岩・凝灰岩などのいわゆるグリーンタフが分布する非火山地域に区分される。

北上低地帯（北上平野）は河岸段丘堆積物や岩手火山噴出物、沖積層が堆積する。これらの堆積物は雫石川を挟み北と南ではその分布が異なり、南側では沖積層が広く分布する。北側では岩手火山噴出物が広く分布し、河岸段丘堆積物は北上川沿いではわずかに点在し、雫石川以北では比較的広く分布する。岩手火山東麓に分布する河岸段丘は下位から松内・黒石野段丘、渋民・高松段丘、好摩段丘、門前寺段丘、上田段丘に区分され、上田段丘を除いて砂礫層上にそれぞれ外山火山灰上部層、渋民火山灰、分火山灰を累積させる。岩手火山噴出物は降下火砕堆積物の他に岩屑なだれ堆積物が分布し、盛岡市街地から玉山村門前寺付近までの北上川沿いでは青山町岩屑なだれ、大石渡岩屑なだれ、平笠岩屑なだれの各堆積物が分布する。沖積層は主に礫層からなり、雫石川以北では各河川沿いの狭い範囲に分布する。雫石川以南で広く分布する沖積層は自然堤防と後背湿地が発達する。本遺跡は礫層を主とする自然堤防上に立地する。

奥羽山脈と北上低地帯との境界部に活構造があることが1950年代頃から指摘され、近年の調査で活断層があることが確認されている。遺跡南西側湯沢団地付近から胆沢郡胆沢町南部にかけての長さ62kmにわたって南北に延びる。この活断層は西傾斜の逆断層で、トレンチ調査によると少なくとも4,500年前頃に活動していると考えられている。（吉田）

（参考・引用文献）

岩手県滝沢村教育委員会（2000）：「岩手山の地質」．滝沢村文化財調査報告書第32集

活断層研究会（1992）：「日本の活断層」．東京大学出版会

川村信人「日本列島最古の化石海洋プレート　―早池峰帯の古生代付加体」

＜http://www.hokudai.ac.jp/scienco/science/H14_11/tiwaku/Topics3.htm＞（2004/3/10アクセス）

各県の地質　岩手県＜http://www.tohoku-geo.ne.jp/data/iwate.html＞（2004/3/10アクセス）

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2001）：「北上低地帯西縁断層帯の評価」

＜http://www.jishin.go.jp/main/chousa/01jun_kitakami/＞（2004/3/9アクセス）

盛岡市の概要＜http://dir.yahoo.co.jp/regional/japanese_regions/tohoku/iwate/cities/morioka/outline/（2004/3/8アクセス）＞

2. 歴史的環境

本宮熊堂B遺跡の所在する盛岡市域には、現在約500以上もの遺跡が確認されている。これら多数の遺跡は、時代・性格・内容において多岐に渡る。しかしながら、現段階での遺跡分布状況は、遺跡の時代によってやや偏在傾向が認められる。

縄文時代の遺跡あるいは散布地は、雫石川北岸に位置する台地上に多くみられ、大新町遺跡などを含む大館遺跡群などが挙げられる。

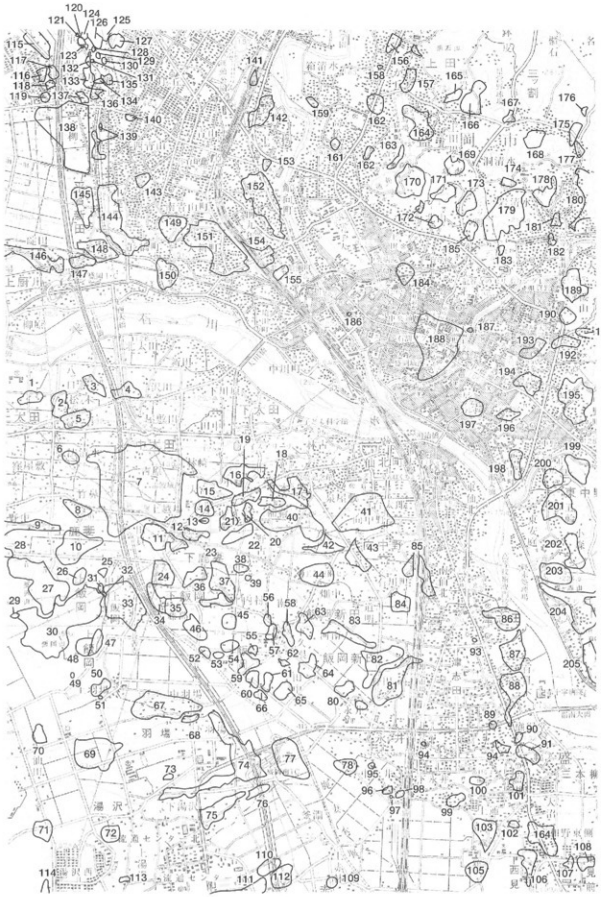
一方、古代の遺跡は本宮熊堂B遺跡の位置する雫石川南岸、北上川西岸の地域に集落遺跡が高い密度で分布している。主に奈良～平安時代の集落が広がる地域である。

中世の遺跡は、丘陵地を中心にみられる館跡等が市域各地に散見される程度で現段階では不明な点が多い。

本書に掲載した本宮熊堂B遺跡周辺において現在、盛岡南新都市区画整備事業関連の発掘調査において縄文時代の遺構・遺物が確認されている遺跡は、本宮熊堂A遺跡・台太郎遺跡などが挙げられる。特に本宮熊堂B遺跡に隣接する本宮熊堂A遺跡は縄文時代晩期を中心とする集落遺跡である。詳細な時期は特定し得ないが縄文時代の陥し穴が周辺の遺跡で確認されている。（福島）

第1表　盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
15	大宮北	古代	集落跡	40	野古A	古代	集落跡
16	小幅	古代	集落跡	40	飯岡沢山	古代	集落跡
17	本宮熊堂（熊堂B）	古代	集落跡	41	台太郎	古代・中世	集落跡
17	本宮熊堂A	縄文・古代	集落跡	42	飯岡才川	古代	集落跡
18	稲荷	古代	集落跡	43	細谷地	古代	集落跡
19	鬼柳A	古代	集落跡	43	向中野館	古代・中世	城館跡



第３図　周辺の遺跡分布

第２表　周辺の遺跡一覧（１）

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	細山	古代・平安	散布地	59	熊堂Ⅰ	縄文・古代	集落跡
2	館（太山館）	古代・（平安）	集落跡	60	熊堂Ⅲ	古代・平安	集落跡
3	八ツ口	古代	散布地	61	熊堂Ⅱ	古代・平安	集落跡
4	八卦	古代・（奈良・平安）	集落跡	62	下久根Ⅱ	縄文・古代	散布地
5	上野屋敷	古代	散布地	63	石神	古代	散布地
6	畑中	古代	集落跡	64	松島	古代	集落跡
7	小沼	古代・平安	集落跡	65	田中	古代・平安	集落跡
8	五兵衛新田	古代	集落跡	66	山谷地	古代・平安	集落跡
9	天沼	古代	集落跡	67	四幡	縄文・古代	散布地
10	竹桑	古代	集落跡	68	新井田Ⅱ	古代	散布地
11	石仏	古代	集落跡	69	本郭	古代・平安	集落跡
12	水門	古代	集落跡	70	アイノ野	縄文	散布地
13	小林	古代	集落跡	71	遠塚	縄文	散布地
14	大宮	古代・中世	集落跡	72	後鳥	縄文	散布地
20	鬼柳C	古代	集落跡	73	小田Ⅰ	古代	散布地
21	鬼柳B	古代	集落跡	74	新山	古代・平安	集落跡
22	野古B	古代	散布地	75	湯沢大館	古代～中世	散布地
23	上越場B	古代	集落跡	76	一本松	平安	散布地
24	辻原敷	古代	集落跡	77	大島	古代	散布地
25	堤	縄文・古代	散布地	78	岡本	古代	散布地
26	月見山	縄文・古代	散布地	79	境田	古代	散布地
27	山中	縄文・古代	散布地	80	墓本	古代	散布地
28	堂沢下	古代	散布地	81	陣当	古代	集落跡
29	細越	縄文	散布地	82	生畔	古代	集落跡
30	飯岡山館	中世	散布地	83	夕覚	古代	散布地
31	高館古墳路	奈良～平安	古墳	84	向中野畑	古代	集落跡
32	高館	縄文	散布地	85	南仙北	縄文・古代	集落跡
33	大柳Ⅰ	古代	集落跡	86	碇塚	古代・奈良	集落跡
34	藤島Ⅱ	平安？	散布地	87	西鹿渡	古代	集落跡
35	鵜鳥	縄文・平安	集落跡	88	百口本	縄文・古代	集落跡
36	一又	古代・平安	散布地	89	坂の下	縄文	散布地
37	西山A	古代	集落跡	90	中島	古代	集落跡
38	西田B	古代	集落跡	91	三本柳端	縄文・古代	集落跡
39	前山	古代	集落跡	92	下永林	縄文・古代	散布地
44	矢盛	古代	散布地	93	いたこ塚	近世	祭祀跡
45	深酒Ⅰ	古代・平安	集落跡	94	永井経塚	近世	祭祀跡
46	飯岡林崎Ⅱ	古代	集落跡	95	永井前山	古代	散布地
47	赤坂Ⅱ	平安？	散布地	96	神田	古代	散布地
48	飯岡赤坂	古代	散布地	97	神田塚	近世	祭祀跡
49	いたこ塚	近世	祭祀跡	98	下永井	古代	散布地
50	小館（羽場館）	中世	散布地	99	荒屋	古代	集落跡
51	砂子塚	古代	散布地	100	高橋A	古代	集落跡
52	飯岡林崎Ⅰ	古代	集落跡	101	高橋B	古代	散布地
53	上新田	古代・平安	集落跡	102	和野	古代	散布地
54	深酒Ⅱ	古代・平安	集落跡	103	三百刈山	古代・中世	集落跡
55	西	古代・平安	集落跡	104	古館	中世	散布地
56	高屋敷Ⅰ	古代	散布地	105	見前館	古代	集落跡・城館跡
57	高屋敷Ⅱ	古代・平安	散布地	106	見前中島	古代	散布地
58	下久根Ⅰ	縄文・古代	散布地	107	伊志田	古代	散布地

第２表　周辺の遺跡一覧（２）

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
106	見前中島	古代	散布地	156	黒石野半	古代（平安）	集落跡
107	伊志田	古代	散布地	157	東緑が丘	縄文	散布地
108	大桜前	古代	集落跡	158	上田一里塚	近世	祭祀跡
109	上浅子	古代	散布地	159	箱清水	縄文・古代	散布地
110	大波野Ⅰ	古代・縄文	散布地	160	石京長根	縄文	散布地
111	大波野Ⅱ	縄文	散布地	161	八幡森	縄文	散布地
112	赤林一里塚	江戸	散布地	162	高松神社裏	縄文	散布地
113	鳥	不明	散布地	163	高松	縄文・古代	散布地
114	湯沢	縄文	散布地	164	上堤頭	縄文	散布地
115	白沢	縄文	散布地	165	長根	縄文	散布地
116	滝沢普森	縄文・奈良・平安	散布地	166	宇登坂	縄文	散布地
117	大銭	縄文・平安	散布地	167	榧石	縄文	散布地
118	別当森	縄文・平安	散布地	168	洞清水	縄文	散布地
119	笹森	縄文	散布地	169	稲荷森	縄文	散布地
120	室小路８	縄文	散布地	170	王山山	縄文・古代	散布地
121	室小路１６	縄文	散布地	171	金比羅前	縄文	散布地
122	室小路５	縄文・平安	散布地	172	市武家屋所	近世	散布地
123	室小路９	縄文	散布地	173	久保屋敷Ａ	縄文	散布地
124	室小路１５	縄文	散布地	174	岩清水	縄文	散布地
125	室小路Ⅱ	縄文・古墳	散布地	175	新茶屋	縄文	散布地
126	室小路３	縄文・奈良・平安	散布地	176	歳ノ神	縄文	散布地
127	穴口	縄文・古代	集落跡	177	新茶屋Ⅱ	縄文	散布地
128	室小路１０	縄文・弥生	散布地	178	合間	縄文・古代	散布地
129	室小路４	縄文	散布地	179	遺下	縄文・古代	散布地
130	室小路１２	縄文・平安	散布地	180	甘石	縄文	散布地
131	室小路６	縄文	散布地	181	屠斗場	縄文・古代	散布地
132	室小路１１	縄文・奈良	散布地	182	猫山田	縄文	散布地
133	室小路７	縄文・古墳・奈良・平安	散布地	183	愛宕山	近世	散布地
134	室小路１３	縄文・古代	散布地	184	四ツ家	古代	散布地
135	室小路１	縄文・平安	散布地	185	久保屋敷Ｂ	縄文	散布地
136	室小路１４	縄文・古代	散布地	186	永禄院経塚	近世	経塚跡
137	諸岩橋	縄文・古墳・奈良・平安	集落跡	187	鍛治町	近世	一里塚
138	高柳	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	188	盛岡城	中世・近世	散布地
139	堤橋	縄文・古代	散布地	189	獅子が鼻	中近世	散布地
140	諸岩橋	縄文・古代	散布地	190	鼻子	縄文・弥生	散布地
141	氏子橋	縄文・古代	散布地	191	新作	縄文	散布地
142	上宮頭	縄文・古代	集落跡	192	瀬戸	縄文・弥生	散布地
143	赤渕	縄文・古代	散布地	193	花頭館（花坂館）	中世	散布地
144	長橋町	縄文・古代	散布地	194	山王山	縄文・古代	集落跡
145	水遺	縄文・古代	散布地	195	砂留	縄文・古代	集落跡
146	幅Ⅲ	古代	集落跡	196	中野館	中世	散布地
147	幅Ⅱ	古代	集落跡	197	大慈寺町	縄文	散布地
148	幅Ⅰ	古代（奈良）	集落跡	198	新山館	古代・中世・近世	集落跡・城館跡
149	大館堤	縄文・古代	集落跡	199	金勢	縄文・古代	散布地
150	稲荷町	縄文・古代～近世	集落跡	200	邑西館	縄文～古代	散布地
151	大新町	縄文・古代	集落跡	201	立石	縄文・古代	散布地・集落跡
152	安倍館（厨川城）	縄文・中世	散布地	202	堰ヶ森	縄文～近世	散布地
153	上堂	縄文・古代	散布地	203	蝶ヶ森館	中世	散布地
154	前九年	縄文	集落跡	204	門	縄文・古代	散布地
155	宿田南	中世・近世	集落跡	205	角下	縄文・古代	散布地

Ⅲ．調査の方法

1．発掘調査の方法

調査開始時、調査区境に沿って調査区を全周する細長い試掘トレンチを掘削し、その土層断面によって調査区全域での遺構検出面を確認した。その後、表土をバックホーにより除去し、それ以降の掘削作業は人力でおこなった。調査中は適宜、写真撮影および実測をおこない記録の保存に努めた。

調査区割とグリッドの設定および遺構名称は、盛岡市教育委員会の方針に従っている。正方形グリッド最小単位を2×2mとした。グリッドの設定および実測に用いた基準点は表3のとおりである。

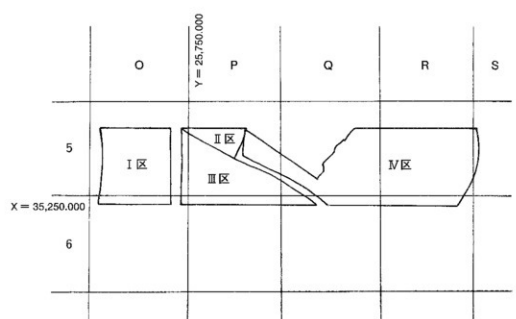
遺構出土遺物は遺構・位置・層位の各単位で取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド・層位単位で取り上げた。

遺構名は遺跡内統一の通番であるため、調査時に付与したものが欠番になることもあったが、統一通番にするべく新しい遺構名・番号を与え報告した。また、過年度調査されている遺構の続きは、過年度調査の遺構名および遺構番号をそのまま踏襲した。遺構名略号は、竪穴住居（ＲＡ）・竪穴住居状遺構（ＲＥ）・土坑（ＲＤ）・溝跡（ＲＧ）・性格不明遺構、その他（ＲＺ）である。

2．整理作業の方法

発掘調査中に作成した遺構実測図は必要に応じて合成および修正をおこない、必要なものは第2原図を作成し浄書した。遺構名は、発掘調査時のものと整理作業・報告書用のものとで新旧の対応表を作成した。

発掘調査中に撮影した遺構写真は、35㎜モノクロ・35㎜カラーリバーサル・6×7版モノクロを使用し、それぞれファイルに整理し台帳を作成した。本書では、そのうち必要な遺構写真について紙焼き、トリミングをおこない写真図版に掲載した。



第4図　調査区割

出土した遺物は、水洗した後注記・接合し、必要な遺物に関しては石膏による復元をおこなった。それら作業過程中、本書に掲載するものを選出し実測、写真撮影を実施した。実測した遺物は挿図版として掲載し、撮影した遺物写真についてもすべてを写真図版に掲載した。掲載した遺物は、原則的に実測に堪え得るものを中心に選出した。また、体部のみの破片は器壁の傾きが判明する遺物のみを選出した。遺物写真は、立面での撮影を原則としたが、立面での撮影が不可能な破片については平面的な撮影をおこなった。

3. 記載方法と凡例

本書で使用する方位は、座標による方位である。よって平面図中に付されている北方位印はすべて座標による北である。検出した遺構の欠損部分は、波線による推定線を加えて表現した。また、調査において任意で設定したトレンチ掘方、調査区境および現代の攪乱は一点鎖線とし、トレンチおよび攪乱の平面はケバを変えて遺構のそれと区別した。

遺構の重複については、平・断面図ですべてを示している。個々の遺構平面図は、基本的に遺構主軸を重視して配置したが、主軸の定まらない不定形、円形の平面形帯を呈する遺構については、北が上になるように掲載した。竪穴住居の平面図はカマドのある側辺を上向きに配置し主軸に合わせ、出土した土器は、本書では以下の通りに分類し報告することとした。

従来のあかやき土器とされている坏類は土師器（非黒色処理、ミガキなし）とした。この分類は客観性を持たせることが目的であるが、非黒色処理でミガキの施されない坏と焼成不良の須恵器坏とは極めて不分明であると言わざるを得ない。両者の決定的な差異は焼成に他ならない。よって、一部で還元が進んでいるものや須恵器の形態・製作技法がみられるものは本来須恵器を指向したと考えられ、器表面に黒斑が顕著にみられるものは本来土師器を指向していたと考えられるため、部分的に還元不足が認められる土器や黒斑を有する土器は遺物観察表中の備考欄に表記した。

掲載した土器実測図は、奈良平城京跡、京都平安京跡の調査報告書に準じて１／４の縮尺で統一した。先述した分類により須恵器の断面は黒塗り、土師器の断面は白抜き、黒色処理されている土師器は半分にアミをかけ表現した。調整の痕跡は表のとおり区分し、内外面ともに中央半分のみの表現にとどめた。口縁部に施されるヨコナデは、図の煩雑さを避けるため表現していない。また、土器実測図における稜線は弱い屈曲や口縁端部、底端部の稜を一点抜き直線、強い屈曲や明瞭な調整の変化点は実線、ロクロ等の回転力を利用した回転ナデは、その凹凸の凸部に二点抜き直線で表現した。

竪穴住居出土遺物は、原則的に住居毎のまとまりで図・写真を掲載したが、遺構間で接合した遺物は本文中・遺物観察一覧に表記し、より原位置に近い出土状況にある遺構の方を優先させ掲載した。（福島）

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

1．基本層序と遺構配置

調査区の基本層序は、上層から順次第１～４層に分かれる。(第５図)

第１層は、現代の耕作土や宅地造成露土など表土層に該当するものである。層厚は場所によって異なるが、概ね10～30cmである。

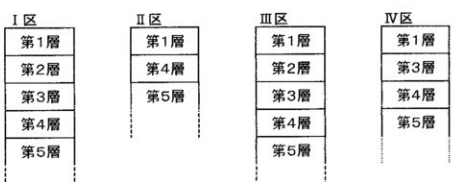
第２層は、黒色シルトの無遺物自然堆積層で、上面は遺構検出面であり、以下下層はいわゆる地山である。Ⅰ区南端、Ⅲ区南端では良好に残存しているが、その他のエリアでは削平のためか確認できない。

第３層は、褐色シルト層で、第２層から第４層へ移り変わる中間的な漸移層である。第２層と同様にⅠ区およびⅡ区の南端では良好に残存しているが、その他のエリアでは確認できない。

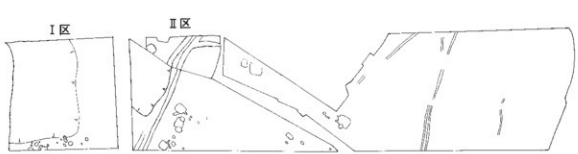
第４層は、黄褐色シルト層である。

第５層は、砂礫層である。Ⅰ区およびⅢ区の北半は第１層（表土）直下で認められる。

遺構配置は、Ⅰ区南端、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区で遺構が認められ、基本層序の第２層が良好に残存する部分は、遺構も良好に検出することができる。



第５図　層序断面模式図



第６図　遺構配置（Ｓ＝１：250）

2. Ⅰ区の遺構と遺物

Ⅰ区は、第18次調査区西端に位置し、概ね方形を呈する。面積は約1,500㎡を測る。この調査区南端は、本宮熊堂B遺跡第15次調査区と、東端は本宮熊堂B遺跡第14次調査区とそれぞれ接する。また、調査区北側には本宮熊堂A遺跡が立地する。このⅠ区は、面積の約70%が昭和初期の土取り場として利用されているらしく深さ80cmにおよぶ大規模な人工的落ち込みと埋め立て土がみられた。よって、遺構は縄文時代晩期～平安時代の遺構と遺物がみられる。

RD162土坑（第8図、写真図版3）

Ⅰ区中央南端60区の北、遺構北東隅が6O1hの区画点から28cm南に位置する。

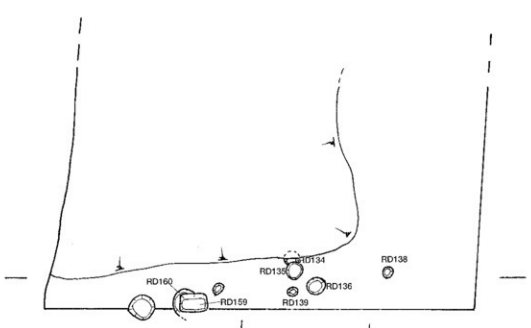
検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高124.11mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

平面形態は、不整な楕円形を呈する。平面規模は東西長1.1m、南北長は93cmを測る。底面はやや凹凸がみられる。土坑の最深部は40cmを測る。

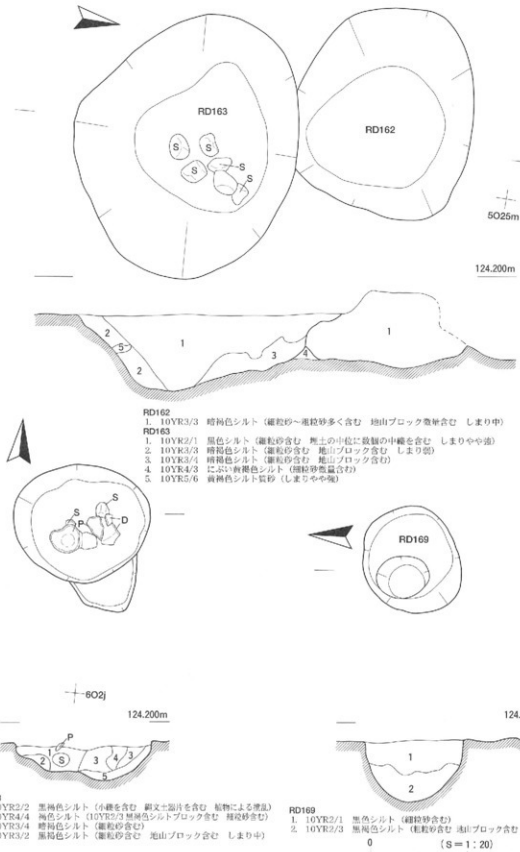
埋土は、黒褐色シルトの単一層で地山シルトをブロック状に若干量含む。この混入物は、埋土中に均一的に存在している。分層不可能な単一層であることや、地山シルトブロックを含むことから、埋土が人為的な堆積である可能性が高い。

この土坑は検出時には不明瞭であったが、RD163土坑との切り合い関係が断面に認められる。この断面からこの土坑はRD162土坑に切られていると判断され、RD163土坑はRD162土坑より古い遺構である。

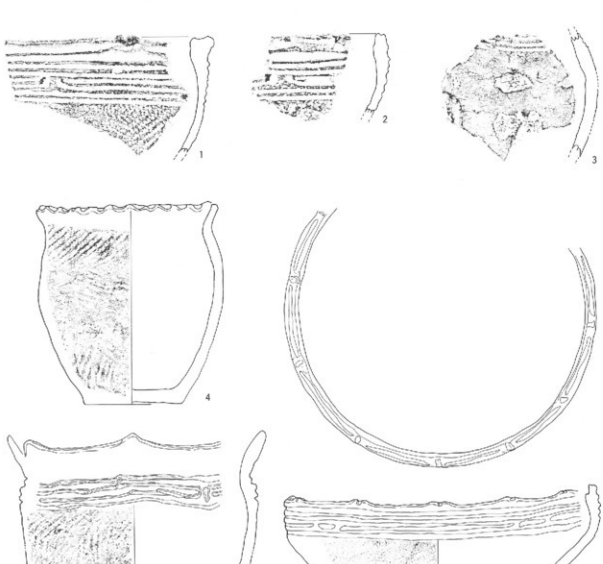
このRD162土坑の性格は不明であるが、人為的な堆積状況や周辺の遺構のあり方などの諸属性より墓壙である可能性が考えられる。



第7図　Ⅰ区遺構配置



第８図　RD162・163・168・169土坑



第９図　Ⅰ区出土遺物（古代以前）

RD163土坑（第８図、写真図版３）

Ⅰ区南端６Ｏ区の北、遺構北端が６Ｏ１ｈの区画点から1.6m南に位置する。

検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

土坑の平面形態は、不整な楕円形を呈する。平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面は北から南の方向に向けてやや深さが増している。土坑の深さは、本来検出できる面より低い位置で検出したためすべて復元推定値であるが、北端で53cm、南端で21cm、最深部で54cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトが堆積しており、概ね2層からなる。上層のシルトは底面まで一気におよんでいる堆積状況を示し、下位層は地山シルトのブロックを含む。上層が分層不可能で大きな単位であることや、下層に地山シルトブロックを含むことから、埋土が人為的な堆積である可能性が高い。

底面より約15cm程度上面では、礫を6個体検出した。これらの礫は、石質・形状・大きさともに不揃いである。しかし、土坑中央にまとまった状態で検出され、他の埋土中には礫の混入が認められないことから何らかの理由で人為的に並べ置かれたと考えられる。

また、この土坑は検出時には不明瞭であったが、断面からRD162土坑と切り合い関係が認められる。この断面からこの土坑はRD162土坑を切っていると判断され、RD162土坑より新しい遺構であると考えられる。

この土坑の性格は不明であるが、人為的な堆積状況、まとまった礫の出土や周辺にある他の遺構のあり方などの諸属性より墓壙である可能性が考えられる。埋土が古代の遺構と明らかに異なり、微量ながら縄文土器片が出土することから縄文時代の遺構と考えられる。**（第9図1）**

RD164土坑（第8図、写真図版3）

I区南端6O区の北、遺構南端が6O1hの区画点の32cm北に位置する。

検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高約124.03mを測る。この面は、近現代の耕作によってもっとも深く削平されている箇所であるとみられる。

土坑の平面形態は、不整な円形を呈する。平面規模は直径78～86cmを測る。底面は、土坑中央で深くなる形状を呈する。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色シルトの単一層で地山シルトをブロック状に若干量含む。

底面より約15cm程度上面では、礫を6個体検出した。これらの礫は、石質・形状・大きさともに不揃いである。しかし、土坑中央にまとまった状態で検出され、他の埋土中には礫の混入が認められないことから何らかの理由で人為的に並べ置かれたと考えられる。

この土坑も性格が不明であるが、人為的な堆積状況、まとまった礫の出土や周辺の遺構のあり方などの諸属性より墓壙である可能性が考えられる。埋土が古代の遺構と明らかに異なり、微量ながら縄文土器片が出土することから縄文時代の遺構と考えられる。**（第9図2）**

RD165土坑（第8図、写真図版3）

I区南端6O区の北、遺構北端が6O1nの区画点より64cm南に位置する。

検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

土坑の平面形態は、不整な円～方形を呈する。平面規模は南北長1.25m、東西長は1.29mを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトが単一層で堆積している。中・上層のシルトには地山をブロック状に若干量含む。

この土坑の性格は不明である。

RD166土坑（第8図、写真図版3）

Ⅰ区南端6O区の北、遺構北東隅が6O1ｊの区画点の45cm南に位置する。

検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

土坑の平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトがほぼ水平に堆積しており、概ね3層からなる。中・上層のシルトには地山をブロック状に若干量含む。

この土坑の性格は不明であるが、その他の土坑と特徴が酷似している。

RD168土坑（第8図、写真図版4）

Ⅰ区南端6O区の北、遺構北東隅が6O2ｊの区画点の45cm南に位置する。

検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

土坑の平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトがほぼ水平に堆積しており、概ね3層からなる。中・上層のシルトには地山をブロック状に若干量含む。

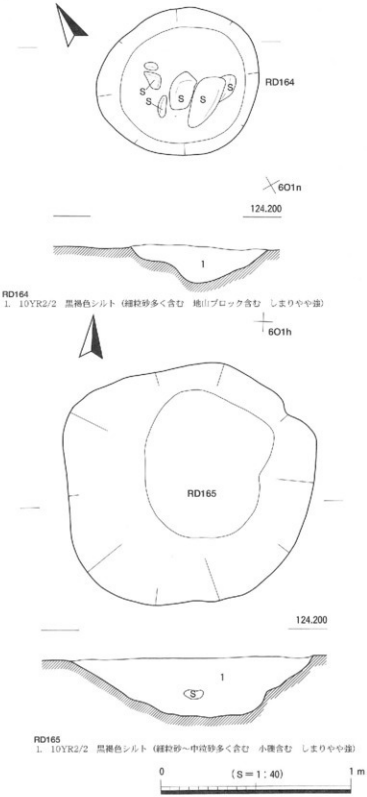
この土坑の性格は不明であるが、原位置を保つ土器が3点まとまって出土したことより、土器の埋納行為が想定され祭祀的な意味合いを持つ土坑であった可能性が高い。

出土した遺物より縄文時代晩期であると考えられる。

出土した遺物は3個体の土器である。**（第10図、写真図版32）**

1は小形深鉢である。頸部～体部最下端まで縄文が施され、口縁部は小単位の波状を呈する。2は浅鉢である。頸部には変形した工字文が施される。口縁部には突起が4方にみられ、口縁端部には沈線が巡る。底部外面はミガキが密に施されている。また、文様の凸部には赤色の顔料がみられ、赤彩が施されていたと考えられる。3は小形深鉢である。頸部～体部最下端まで縄文が施されている。

3点とも土坑中よりまとまって出土した。いずれも大洞A式と考えられる。



第10図　RD164・RD165土坑

RD160土坑（第11図、写真図版５）

Ｉ区南端６Ｏ区の北、遺構北東隅が６Ｏ１ｈの区画点の45cm南に位置する。

検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

遺構の大半はＲＤ160土坑によって切られており、さらに南側は調査区外へと続く。切り合い関係からこの土坑は、ＲＤ160土坑より古い遺構であると考えられる。

平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。

平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

埋土は、黒褐色のシルトの単一層が堆積しており、火山灰をブロック状に若干量含む。

なお、この土坑の性格は不明である。

RD159土坑（第11図、写真図版５）

Ｉ区南端６Ｏ区の北、遺構北東隅が６Ｏ２ｆの区画点より98cm西に位置する。

検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

平面形態は、東西を指向する隅丸長方形を呈する。

平面規模は南北長2.18m、南北長は1.22mを測る。底面は全体の深度差が１cm内外で収まり平坦である。土坑の深さは北端で34cm、南端で34cm、中央部で35cmを測る。

埋土は、黒褐色のシルトがほぼ水平に堆積しており、概ね３層からなる。中・上層のシルトには火山灰をブロック状に若干量含む。

床面直上で口縁部の欠損した土師器坏が出土した。

この土坑は規模、形態、遺物の出土遺物のあり方から墓壙である可能性が高い。

RD166土坑（第12図、写真図版５）

Ｉ区６Ｏ区の北に位置する。

平面円形を呈する皿状の小土坑である。掘り込みは浅く、大幅に削平が及んでいると考えられる。

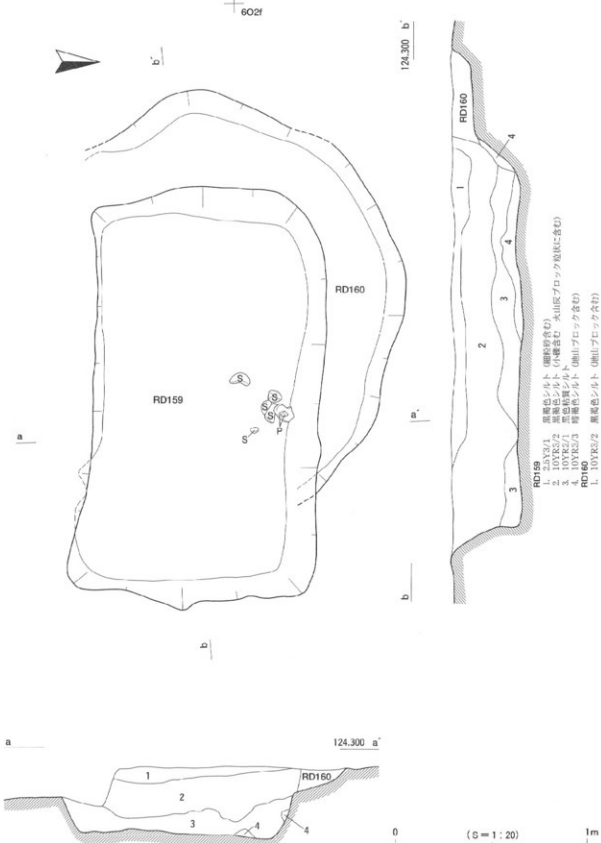
埋土に火山灰を含まず、遺物も出土しなかったため時期は不明である。

RD167土坑（第12図、写真図版５）

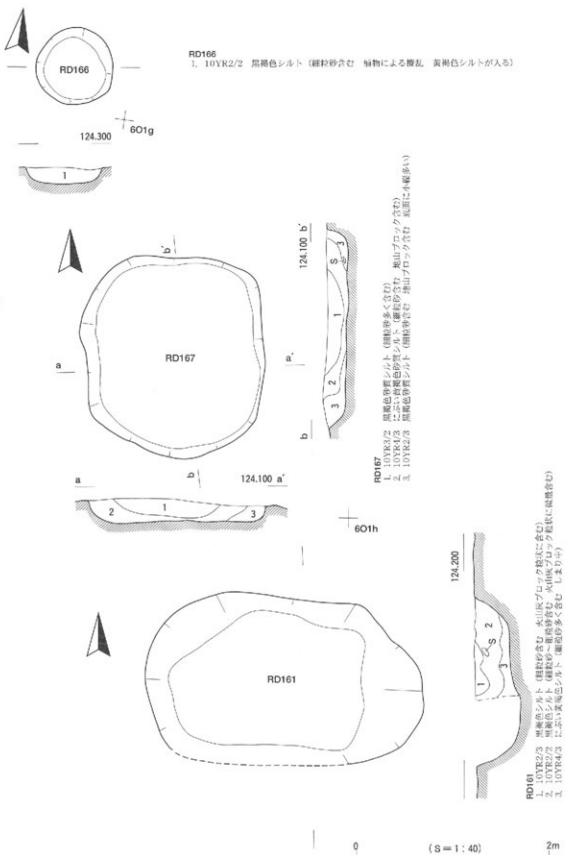
Ｉ区６Ｏ区の北に位置する。

平面不整な方形を呈する浅い土坑である。

埋土から縄文土器片が出土しているが、他の古代以前に属する遺構とは埋土の様子がことなるため、混入遺物である可能性も考慮に入れる必要がある。（**第９図３**）



第11図　RD159・160土坑



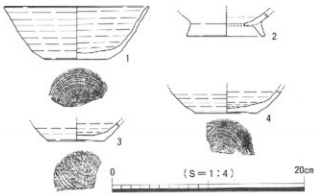
第12図　RD161・166・167土坑

RD161土坑（第12図、写真図版５）

Ⅰ区南端６Ｏ区の北、遺構北東隅が６Ｏ１ｈの区画点の45cm南に位置する。

検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。



第13図　RD159・167土坑出土遺物

埋土は、黒褐色のシルトがほぼ水平に堆積しており、概ね３層からなる。中・上層のシルトには火山灰をブロック状に若干量含む。

この土坑の時期および性格は不明である。（福島）

3. Ⅱ区の遺構と遺物

Ⅱ区は、南北辺に対して東西辺が約２倍長い直角三角形を呈する。調査区調査区中央やや西寄りに位置し、面積は、約370㎡を測る。

この調査区南端はⅢ区と、東端は本宮熊堂Ｂ遺跡第14次調査区とそれぞれ接する。また、調査区北側には本宮熊堂Ａ遺跡が立地する。この調査区では、主に平安時代の遺構と遺物がみられる。

RA081竪穴住居（第15図、写真図版８・９）

調査区西側のＶｐ10c付近に位置し、西側１/３は調査区外に続く。

検出面は、第２層上面である。

平面形態は、やや不整な方形を呈し、規模は北壁4.5m以上、東壁３m、南壁２m以上を測る。

主軸は、南東方向である。

埋土は、一部撹乱の及ぶ箇所が認められるが、主に赤黒のシルトが堆積している。埋土中には礫や粗砂が多く混じる。

出土した遺物は土師器坏、甕である。１～６は土師器坏である。（第16図、写真図版26・27）

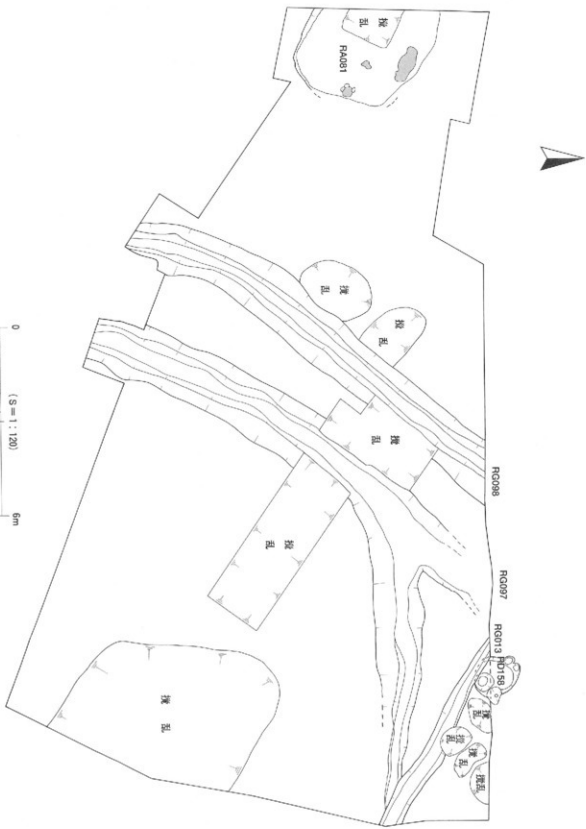
１～３・５はＰ１の焼土を伴う埋土から出土し、４・６は竪穴住居埋土から出土した。

４は体部下半でやや膨らみを持つ特異な器形を呈する。

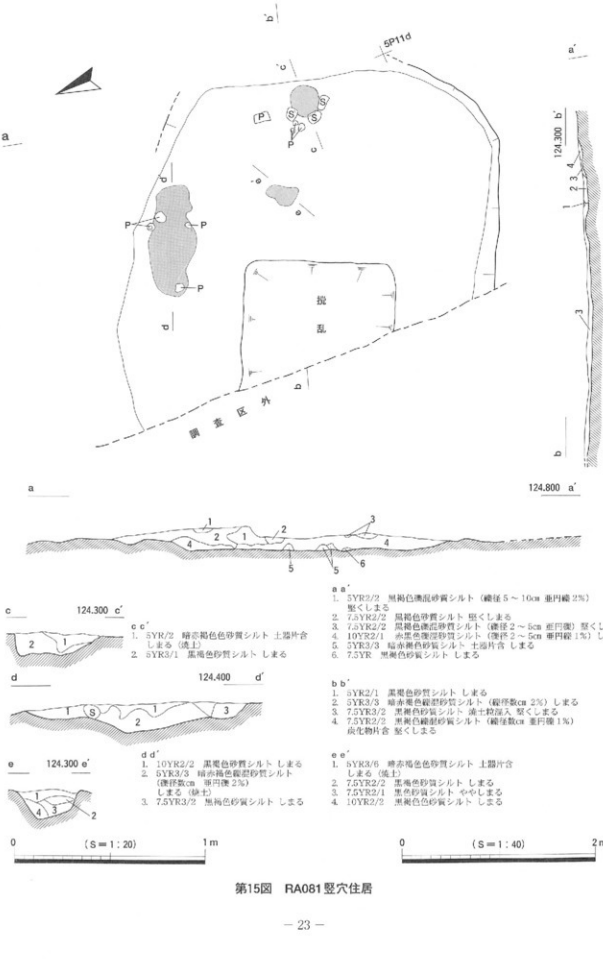
底部が残存していない４は不明であるが、１・２・６は回転糸切り後無調整である。３・５は底部切り離し法不明であるが、切り離し後底部および体部再下端に回転ヘラケズリが施されている。

７はＰ１埋土、竪穴住居埋土から出土した土師器甕である。成形および調整にロクロは使用されていない。外面調整は下半と上半で、それぞれ痕跡の見え方が異なるが、調整の単位幅、調整方向ともに同じであるため同一工具で施されたと考えられる。内面調整は横方向のハケで体部全面、密に施されている。

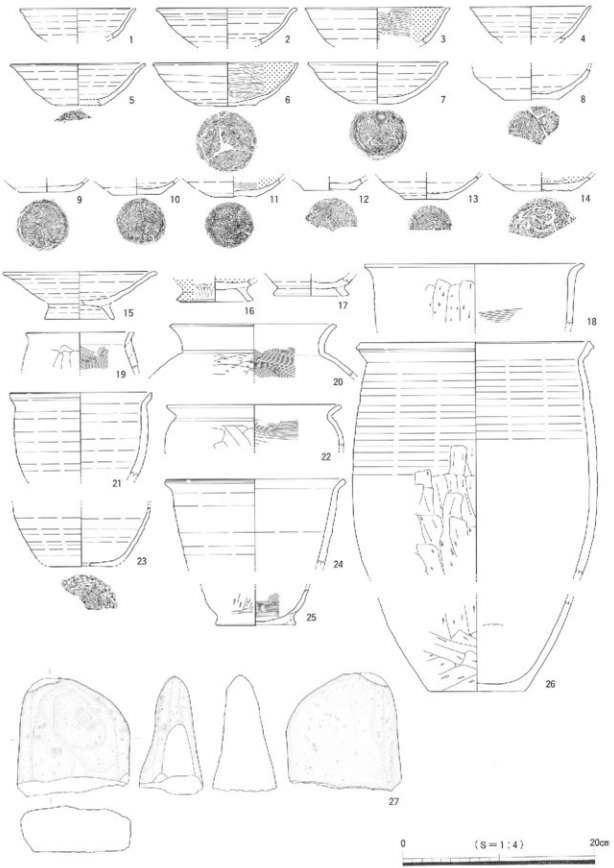
いずれも９世紀後半～10世紀初頭に属する。



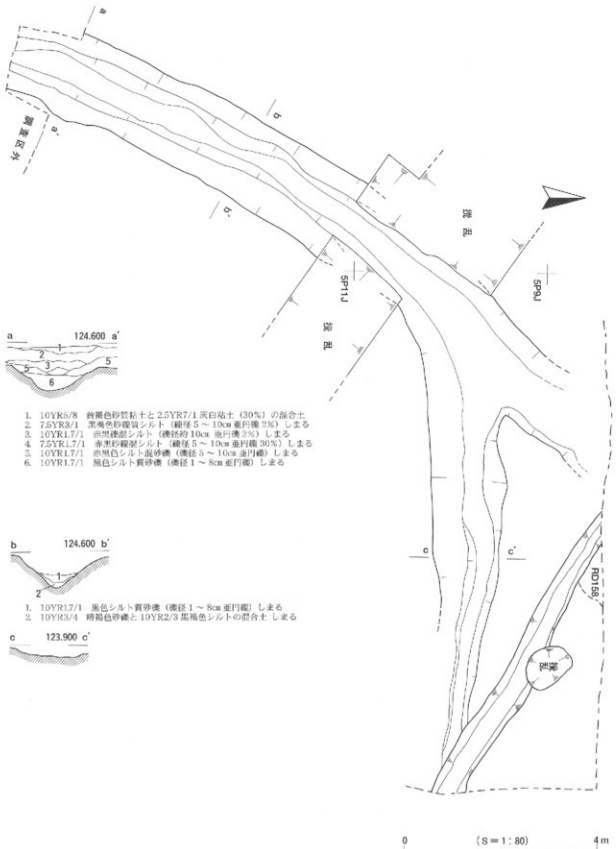
第14図　Ⅱ区遺構配置



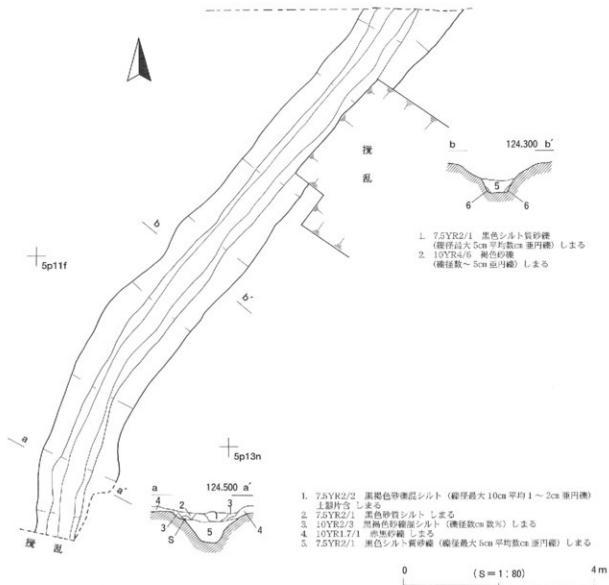
第15図　RA081竪穴住居



第16図　RA081竪穴住居出土遺物



第17図　RG097溝跡



第18図　RG098溝跡

RG097溝跡（第17図、写真図版10・11）

調査区中央、Vp13f～8iに位置する。約2m南東側にはRG098溝跡が併走する。また、溝南端はⅢ区に続く。

規模は、開口部幅1.4～1.7mを測る。

断面形はロート状を呈し、底面は南西に向かって下がる傾斜が認められる。埋土は、上下2層に分かれ、上層は黒褐色シルトである。地山が混入している。下層は黒色シルト質砂礫で地山に由来すると思われる。

RG098溝跡（第17図、写真図版10・11）

調査区中央、Vp13f～8iに位置する。約2m南東側にはRG097溝跡が併走する。また、溝南端はⅢ区に続く。

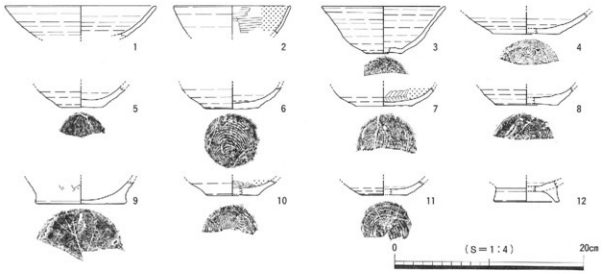
規模は、開口部幅1.4～1.7mを測る。

断面形はロート状を呈し、底面は南西に向かって下がる傾斜が認められる。埋土は、上下2層に分かれ、上層は黒褐色シルトである。地山が混入している。下層は黒色シルト質砂礫で地山に由来すると思われる。

RG097・098溝跡出土遺物（第19図、写真図版29）

24個体の土師器坏が出土したが、いずれも破片である。 いずれも9世紀後半～10世紀初頭に属する。

（吉田）



第19図　RG097・098溝跡出土遺物

4. Ⅲ区の遺構と遺物

Ⅲ区は第18次調査区南東端に位置し、概ね三角形を呈する。面積は約1,400㎡を測る。この調査区南端は、本宮熊楠Ｂ遺跡第15次調査区と、西端は本宮熊楠Ｂ遺跡第14次調査区とそれぞれ接する。竪穴住居など主に古代の遺構を確認した。

RA069 竪穴住居跡（第21・22図、写真図版12・13）

調査区中央やや東寄り、２Ｉ区南西隅に位置する。遺構北西隅が区画点２Ｉ21ｅに近接する。ＲＤ170土坑を切って存在する。

検出面は第１層直下、第５層上面であり、標高T.P.124.400mを測る。第５層の礫層上面に遺構は存在する。

平面形態は、長方形を呈するが、西側コーナーが内側に大きく歪んでいる。

規模は、短軸である南北長2.86m、長軸である東西長は3.65m、深さ5.2cmを測る。

埋土は、概ね単層のシルトからなり、埋土中には火山灰をブロック状に多く含む。火山灰ブロックは、比較的大きな塊状を呈し、降下時の純粋な堆積ではないと考えられる。

側壁は、すべて良好に残存しており、いずれの側壁立ち上がりは明瞭である。

カマドは、住居南側コーナー付近、南側壁やや西寄りに位置する。カマド両袖は、崩落のためか不整な形状を呈しており、特に東袖は西袖に比べ平面的に大きく広がっている。

カマド燃焼部はカマド両袖の間に位置し、焼土化した面は煙道にまで及んでいる。燃焼部の中央には支脚として用いられたと考えられる土師器高台付坏が逆さまで出土した。

煙道は、住居の外に約１ｍの長さで存在する。埋土中に長く帯状の焼土層を確認した。この焼土は本来煙道の天井部の崩落によって生じたものと考えられるため、煙道は本来トンネル状に作られていたものと考えられる。

床面は、残存している長さ南北3.20m、東西2.65mを測り、堅く締まっているが、礫層を掘り込んで作られているため凹凸のある石混じりの床面である。

床面では散乱した状態で遺物を検出した。特にカマド周辺には多くの土器が出土した。また、柱穴はみられなかった。

貼床は、顕著なものが確認できなかった。多少の凹凸を補う程度のものであったのかもしれない。

柱穴はみられなかった。

遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土師器を中心に土器類が出土した。５・９・10・11・16が床面直上、３はカマド支脚、８はカマド燃焼部、13・17はカマド袖の中からそれぞれ出土した。その他は竪穴住居埋土出土である。

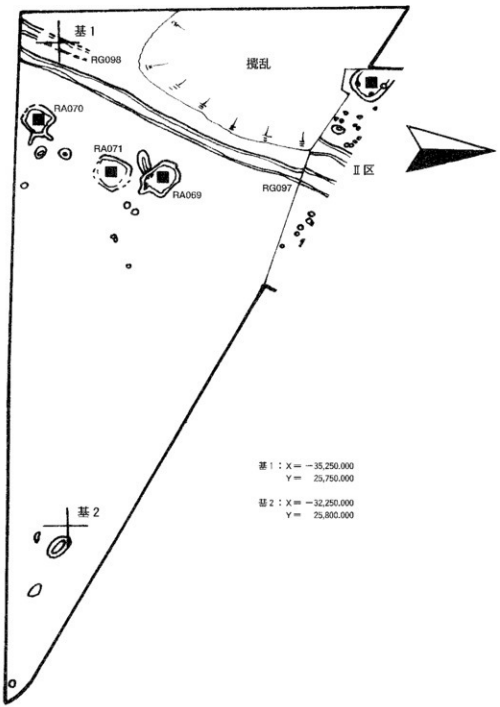
出土した遺物は土師器坏、甕である。

１～10は土師器坏である。１・５は内面ミガキ調整と黒化処理が施されている。３は高台付坏である。

１は体部外面に墨書が認められる。文字であると考えられるが欠損しているため判読不能である。残存している部分から類推すると「山」の可能性が考えられる。

４はやや深い法量の坏である。

11～18は土師器甕である。11・13・17・18はロクロが用いられていないが、12・14・15・16はロクロが用



第20図　Ⅲ区遺構配置（S＝1：400）

いられている。

時期は、遺構埋土に十和田ａ降下火山灰がみられることや、遺物の特徴から考えて９世紀後半～10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

RA070竪穴住居跡（第24・25図、写真図版28）

調査区中央やや西寄り、２Ｈ区南端中央に位置する。遺構南西隅が区画点２Ｈ24ｅに近接する。

検出面は第１層直下、第２層上面であり、標高約T.P.124.400mを測る。

平面形態は、ほぼ方形を呈する。

規模は、南北長3.02m、東西長2.92mを測る。

埋土は、概ね上下２層のシルトからなり、ほぼ水平堆積である。埋土上層中には火山灰ブロックが含まれている。

側壁は、南西側壁の一部が植物の影響で撹乱されているが、その他はすべて良好に残存している。いずれの側壁立ち上がりも明瞭である。

カマドは、住居東側コーナーに２基存在し、北東方向に煙出しが延びるものと南東方向に煙出しが延びるものを確認した。

北東側カマド両袖は、わずかな高まりをもって確認できた。

北東側カマドの燃焼部は、カマド両袖の間に位置し、焼土化した面は円形に広がる。

北東側煙道は、住居の外に約１mの長さで存在する。煙道は本来トンネル状に作られていたものと考えられるが、天井部は削平のため確認できなかった。

南西側カマド両袖は、痕跡すら残存していなかった。

南西側カマドの燃焼部焼土は、北東側カマド袖近くで確認した。煙道直線上の住居床面に存在することから、この南西側カマドに伴う焼土であると考えられる。

２基のカマドは残存状況の比較から併存していたとは考えられない。両袖が欠損し煙道と燃焼部焼土のみが残っている南西側カマドの方が古いカマドで、両袖ともに残存している北東側のカマドが新設されたと考えられる。

床面は、残存している長さ南北2.80m、東西2.55mを測り、堅く締まっているが、礫層を掘り込んで作られているため凹凸のある石混じりの床面である。

貼床は、顕著なものが確認できなかった。多少の凹凸を補う程度のものであったのかもしれない。

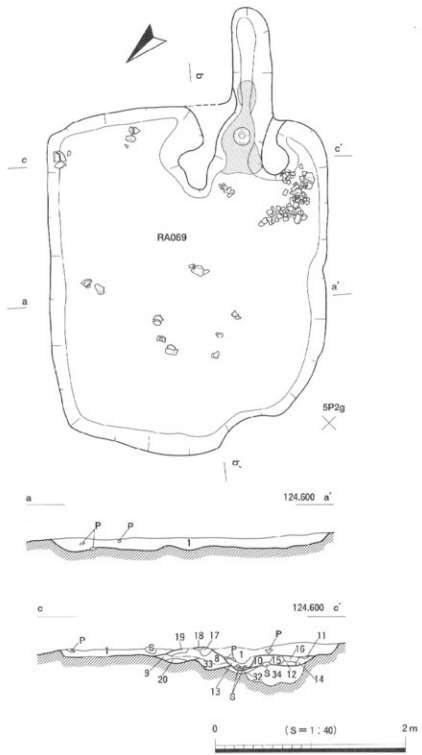
柱穴はみられなかった。

出土した遺物は、土師器・須恵器である。**（第26図、写真図版28）**

１・２は煙道、４は床面直上、５はカマド埋土、その他は住居埋土出土である。

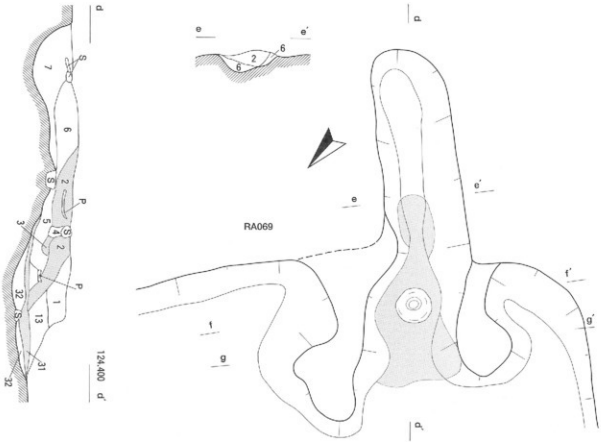
５の須恵器坏以外はすべて土師器坏である。４・６は内面ミガキ調整、黒化処理が施されている。

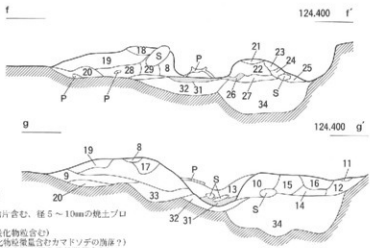
時期は、遺構埋土に十和田ａ降下火山灰がみられることや、遺物の特徴から考えて９世紀後半～10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。



RA069埋土断面
1. 10YR2/2 黒褐色シルト（径1～2cmの大山灰ブロック含む 炭化物粒・焼土粒ごく微量含む 粗粒砂多い 径3～5cmの礫多い しまり中）
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（径1～2cmの大山灰ブロック含む 炭化物粒・焼土ブロック微量含む）

第21図　RA069竪穴住居



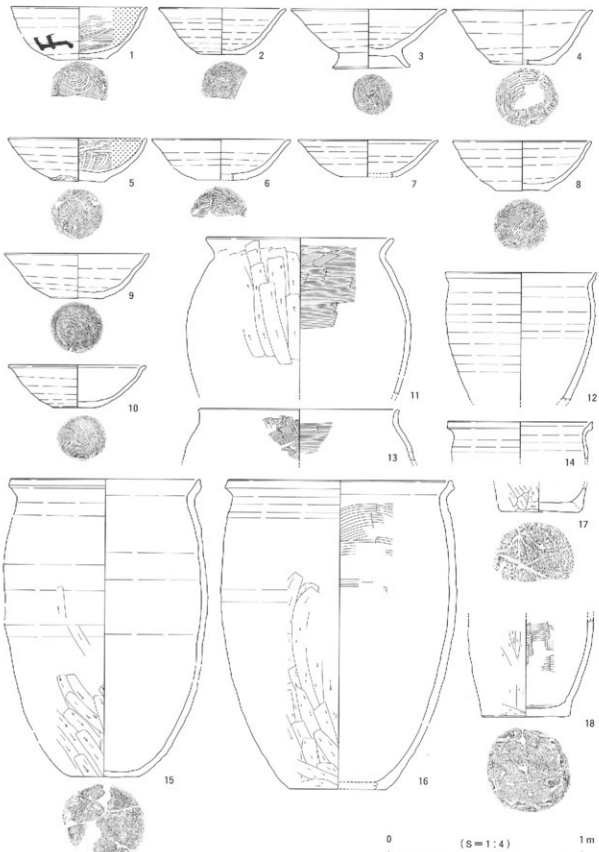


RA069 カマド断面

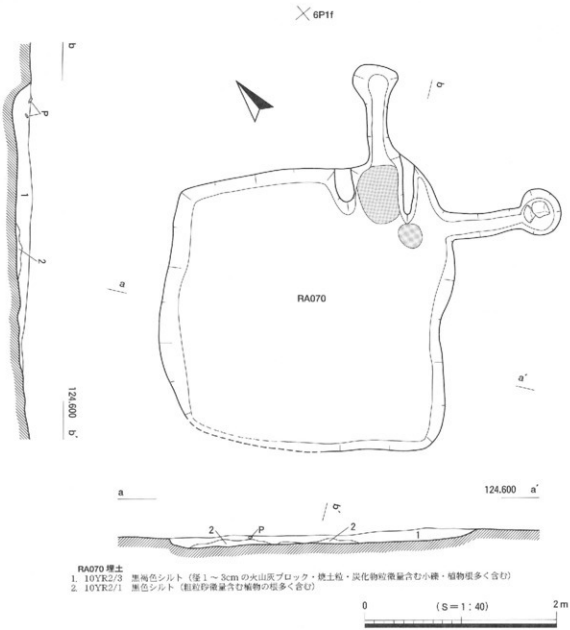
1. 10YR2/2　黒褐色シルト（経1～2cmの火山灰ブロック含む 炭化物粒・焼土粒ごく微量含む粗粒砂多い径3～5cmの礫多い）
2. 5YR4/6　赤褐色シルトの焼土（炭化物粒微量含む）
3. 5YR5/8　明赤褐色シルトの焼土（炭化物粒微量含む）
4. 10YR2/1　黒色シルト（焼土粒含む極乱？）
5. 7.5YR4/4　褐色シルト（炭化物粒、細粒砂微量含むやや疲変する）
6. 7.5YR3/2　黒褐色シルト（炭化物粒微量含む、粗粒砂・粗粒砂含む）
7. 10YR2/3　黒褐色シルト（焼土粒・炭化物粒微量含む小礫多く含む）
8. 10YR4/2　灰黄褐色シルト（炭化物片含む、径5～10mmの焼土ブロック含むカマドのソデ部分）
9. 7.5YR4/3　褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む）
10. 10YR4/6　褐色シルト（焼土粒・炭化物粒微量含むカマドソデの強度？）
11. 5YR5/8　明赤褐色シルトの焼土（焼土粒・炭化物粒微量含む）
12. 7.5YR2/2　黒褐色シルト（細粒砂・粗粒砂含む）
13. 7.5YR4/2　灰褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む）
14. 10YR3/4　暗褐色シルト（黄褐色シルトブロック含む　植物による攪乱）
15. 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（細粒砂～粗粒砂含む）
16. 10YR4/6　褐色粘土質シルト（焼土ブロック・炭化物粒微量含む）
17. 10YR5/6　黄褐色シルト（炭化物粒極微量含む　細粒砂含む）
18. 7.5YR2/2　黒褐色シルト（焼土ブロック・炭化物粒含む）
19. 7.5YR4/6　褐色粘土質シルト（焼土ブロック・炭化物粒多量に含む）
20. 7.5YR4/6　褐色粘土質シルト（炭化物粒含む）
21. 7.5YR4/2　灰褐色粘土質シルト（焼土・炭化物粒含む）
22. 10YR4/4　褐色粘土質シルト（径3cm大の焼土ブロック含む　炭化物粒含む）
23. 7.5YR3/2　黒褐色シルト（炭化物粒微量含む）
24. 7.5YR2/2　黒褐色シルト（細粒砂～粗粒砂含む）
25. 10YR3/1　黒褐色シルト（粗粒砂含む）
26. 5YR5/6　明赤褐色シルトの焼土（炭化物粒微量含む）
27. 7.5YR3/2　黒褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む）
28. 7.5YR3/3　暗褐色粘土質シルト（炭化物粒微量含む　土器片を含む）
29. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト（焼土粒・炭化物粒微量含む）
30. 7.5YR3/1　黒褐色シルト（炭化物粒微量含む）
31. 5YR3/6　暗赤褐色シルトの焼土（明赤褐色の焼土粒を含む　炭化物粒を含む）
32. 7.5YR2/3　極暗褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む小礫含む）
33. 7.5YR3/2　黒褐色シルト（焼土ブロック・炭化物粒微量含む粗粒砂含む）
34. 10YR2/1　黒色シルト（粗粒砂含む　KD150の埋土）

0　（S＝1：20）　1m

第22図　RA069竪穴住居カマド



第23図　RA069竪穴住居出土遺物



第24図　RA070竪穴住居

RA071竪穴住居跡（第27図、写真図版28）

調査区中央やや西寄り、2H区南端中央に位置する。遺構南西隅が区画点2H24eに近接する。

検出面は第1層直下、第2層上面であり、標高約T.P.124.000mを測る。

平面形態は、ほぼ方形を呈すると思われるが、撹乱により輪郭が定かではない。

規模は、南北長3.74m、東西長3.34mを測る。

埋土は、単層の黒褐色シルトからなり、ほぼ水平堆積である。埋土上層中には火山灰ブロックが含まれている。

個別は、西側壁の一部および東側壁が残存しているが、その他は撹乱により失われている。

床面は、残存している長さ南北2.80m、東西2.55mを測り、堅く締まっているが、礫層を掘り込んで作られているため凹凸のある石混じりの床面である。

西側床面に焼土や遺物を含む高まりを確認した。当初カマドの袖と想定したが、規模から考えて不適切である。

その他住居とすべき施設は認められなかった。

欠損部分など不明な点が多いが、規模や形態、遺物の出土状況から考えて竪穴住居であると思われる。

出土した遺物は、土師器・須恵器である。**(第28図、写真図版28)**

1・7は袖状の高まりから、その他はすべて埋土中から出土した。

1～3・6はすべて土師器坏である。1・3・6は内面ミガキ調整、黒化処理が施されている。

1・3はいずれも焼成後とみられる線刻が施されている。記号か文字かは判然としない。

4・5は須恵器坏である。

7は土師器甕である。頸部～口縁部は欠損している。内外面工具による調整と考えられるが摩滅のため不明瞭である。

時期は、遺構埋土に十和田a降下火山灰がみられることや、遺物の特徴から考えて9世紀後半～10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

RG097溝跡 (第29図、写真図版17)

Ⅲ区西端に位置する。検出面は第1層直下、第5層上面および2層上面であり、標高約T.P.124.400mを測る。

ほぼ南北方向を指向する直線的な溝である。南は第15次調査区に、北はⅡ区に延びる。

規模は、幅45～58cm、長さ34mを測る。

断面形態は、中央に深い掘り込みがあり、両肩に段を有する形状である。

埋土は、大きく分けて東側肩部のシルト層とその他の溝本体埋土とに分かれる。肩部の埋土は最も早い段階に遺構の肩崩れによって生じたものと推定できる。

埋土には最下層で滞水性粘土がみられる部分が存在し、このことから最下層埋没後、一旦埋没が停止しているようである。また、その直上層は小礫や砂粒を含むことから流水状態が想定される。

形態や方向性から人工的に掘削された溝であると考えられるが、自然に埋没したものと考えられる。

底面は凹凸が激しく、流水あるいは滞水のためか鉄分の沈着が認められる。

出土遺物は、古代の土器が出土した。**(第30図、写真図版27・28)**

1・3・4・6～8が埋土中から出土した遺物である。

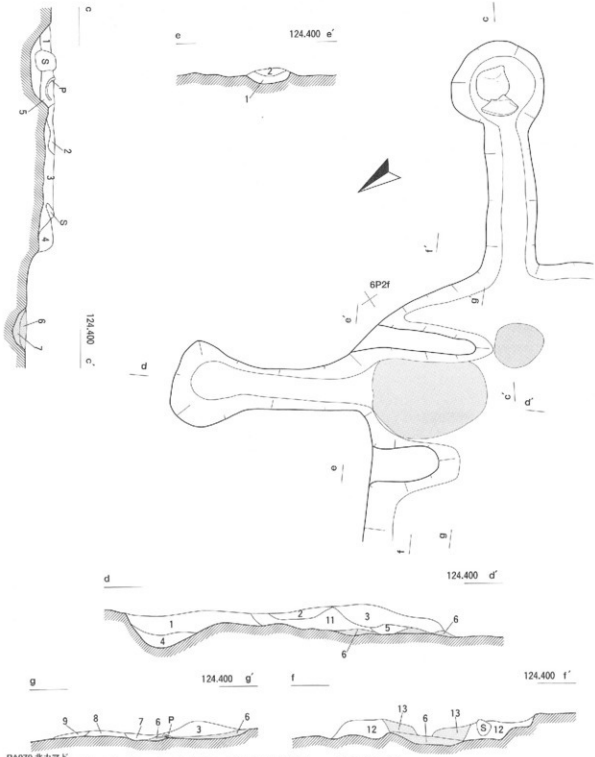
1・3・6・7は土師器坏である。

1は体部外面に線刻が認められる。文字か記号かは判然としないが、「井」状の4本線がみられる。

6は内外面黒化処理されている。法量が大きく、外面にヘラケズリ・内外面に細かなミガキが施され、回転ナデが施されていないため8世紀代の土器であると考えられる。

4は須恵器坏である。

8は土師器甕である。底部外面に細かい砂粒の付着が認められる。



RA070 北カマド

1. 10YR2/2　黒褐色シルト（径1～2cmの火山灰ブロック多く含む　細粒砂含む）
2. 7.5YR3/4　暗褐色シルト（炭化物粒含む　黒粒砂含む　部分的に著く赤変する）
3. 7.5YR2/3　極暗褐色シルト（焼土粒・炭化物粒微量含む　小礫含む）
4. 10YR3/4　暗褐色シルト（地山ブロック含む　小礫多く含む）
5. 7.5YR5/8　明褐色シルト（焼土ブロック・炭化物粒含む）
6. 7.5YR3/2　黒褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む）
7. 7.5YR4/6　褐色シルト（焼土ブロック・炭化物片含む）
8. 7.5YR4/3　褐色シルト（炭化物片含む　黒粒砂含む）
9. 10YR5/8　黄褐色シルト（焼土粒・炭化物粒含む　小礫含む）
10. 10YR4/4　褐色シルト（細砂含む）（炭化粒含む　焼土粒・炭化物粒含む　小礫含む）
11. 10YR2/2　黒褐色シルト（炭化物粒微量含む　細粒砂含む崩壊したソデ部？）
12. 7.5YR3/2　黒褐色シルト
13. 5YR3/4　暗赤褐色シルトの焼土（焼土粒・炭化物粒含む細粒砂含む）

RA070 東カマド

1. 10YR3/2　黒褐色シルト（細粒砂含む）
2. 10YR2/3　黒褐色シルト（細粒砂含む）
3. 10YR3/3　暗褐色シルト（炭一粒・炭化物粒微量含む　小礫含む）
4. 7.5YR3/4　暗褐色シルト（細粒砂含む　地山ブロック含む）
5. 10YR3/4　褐色シルト（細粒砂含む　地山ブロック含む）
6. 5YR6/6　橙色シルトの焼土
7. 7.5YR6/6　橙色シルト（やや焼成をうける）

0　（S＝1：20）　1m

第25図　RA070竪穴住居カマド

時期は、これまでの調査成果や出土した遺物より８世紀後半～10世紀前半にかけての遺構であると考えられる。

RG098溝跡（第29図、写真図版17）

Ⅲ区西端に位置する。検出面は第１層直下、第５層上面および２層上面であり、標高約T.P. 124.400mを測る。

攪乱によって大部分が失われているが、ほぼ南北方向を指向する直線的な溝である。南は第15次調査区に延び、北はⅡ区に延びる。

規模は、幅1.03m、長さ6.2mを測る。

断面形態は、中央に深い掘り込みがあり、箱状を呈する。また、両肩に段を有する形状である。

埋土は上層から大きく分けてシルト層、砂質シルト層、粘質シルト層に分けられる。

埋土には最下層で滞水性粘土がみられる部分が存在し、このことから最下層埋没後、一旦埋没が停止しているようである。また、その直上層は小礫や砂粒を含むことから流水状態が想定される。

形態や方向性から人工的に掘削された溝であると考えられる。

底面は凹凸が激しく、流水あるいは滞水のためか鉄分の沈着が認められる。

出土遺物は、古代の土器が出土した。**（第31図、写真図版27・28）**

２・５は土師器坏である。内外面ともに回転ナデのみの調整である。

時期は、これまでの調査成果や出土した遺物より８世紀後半～10世紀前半にかけての遺構であると考えられる。

RD170土坑

ＲＡ069竪穴住居床面で検出した土坑である。

埋土は３層からなり、すべて暗い色調のシルト層である。

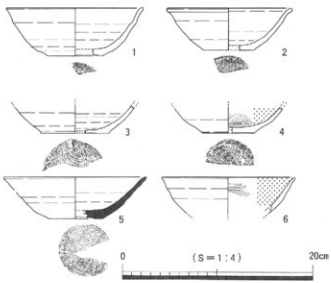
残存する東西長2.3m、南北最大幅1.0mを測る長楕円形の土坑である。残存する深さは60cmを測る。

出土遺物は細片でしかないが縄文土器片と思われる土器がわずかに出土した。

時期は、埋土の色調や土質、層位的に判断して竪穴住居以前であると考えられる。

RD171～175土坑

５Ｐ23ｋ付近に位置するいずれも円形の浅い小土坑である。



第 26 図　RA070 竪穴住居出土遺物

性格および時期はそれぞれ不明である。

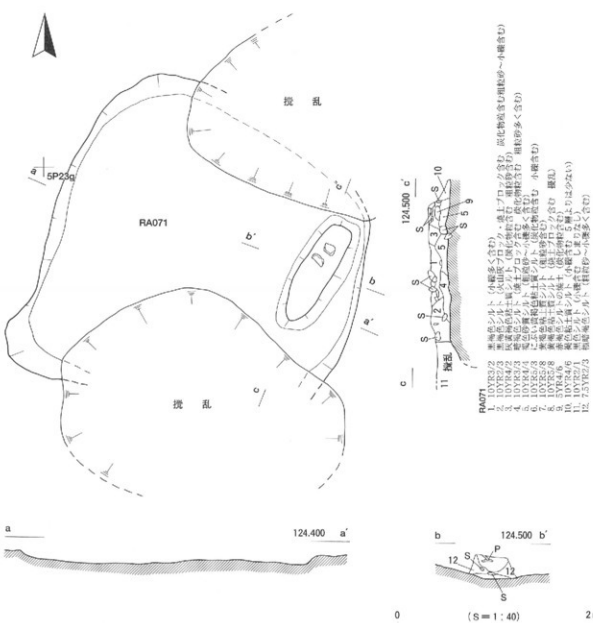
RD176土坑

不整な円形を呈する浅い土坑である。

北側辺は撹乱により欠損しているが、その他は良好に残存する。

埋土上層に微量の炭化物が認められる。

遺物の出土はなく、時期および性格は不明である。



第27図　RA071竪穴住居

RD177土坑

不整な方形を呈する土坑である。

埋土中には地山起源と考えられる礫がわずかに認められる。

遺物の出土はなく、時期および性格は不明である。

RD178土坑

不整な円形を呈する浅い土坑である。

埋土中には火山灰ブロックを含む。

遺物の出土はなく、時期および性格は不明であるが、埋土に含まれる火山灰は十和田ａ降下火山灰と考えられるため古代の遺構である可能性が高い。

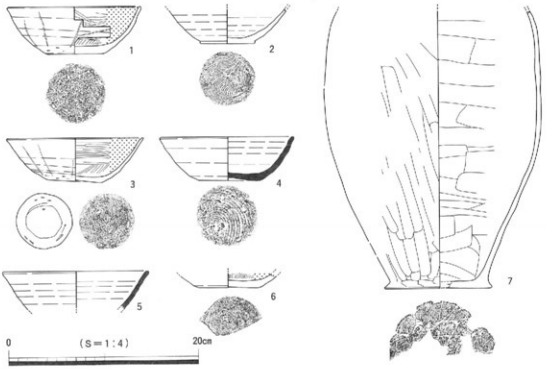
RD179土坑

不整な円形を呈する土坑である。

埋土は黒色シルトの単層である。埋土中には地山起源と考えられる礫を含む。

出土遺物は、弥生土器が出土した。

性格は不明であるが、遺構埋土や出土遺物より古代以前の遺構であると考えられる。



第28図　RA071竪穴住居出土遺物

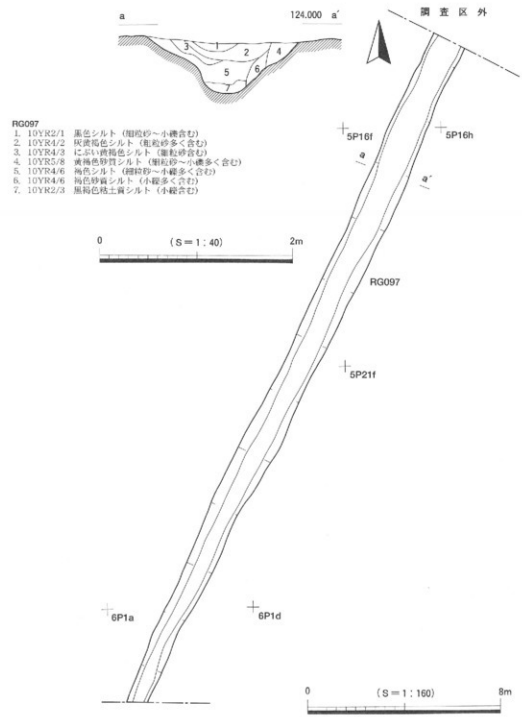
RD180土坑

円形を呈する小土坑である。

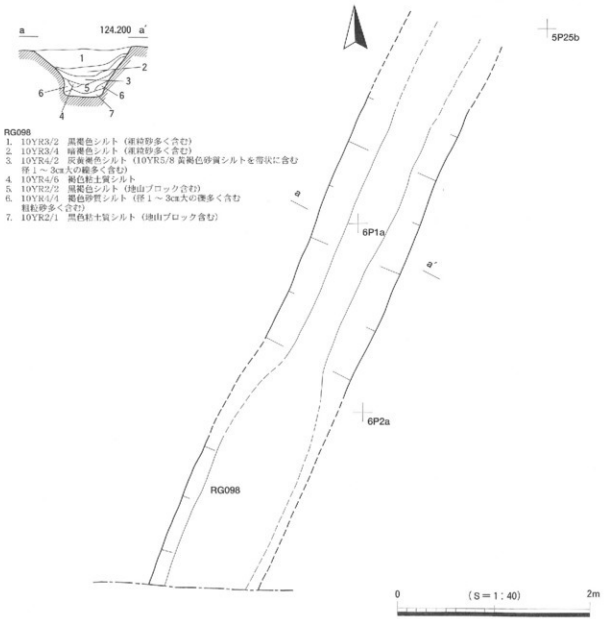
埋土は2層からなるシルト層である。

出土遺物は、埋土下層中より土師器甕が1点出土した。

性格は不明であるが、出土遺物より9後半～10世紀初頭の遺構であると考えられる。



第29図　RG097溝跡



第30図　RG098溝跡

RD181土坑

円形を呈する土坑である。西側に突出部がみられるが、別の遺構の可能性も考えられる。

埋土は、概ね上下2層のシルト層からなる。上層には火山灰ブロックが細かな粒状に認められ、同時に炭化物も粒状に含まれる。

遺物の出土はなく、時期および性格は不明であるが、埋土に含まれる火山灰は十和田a降下火山灰と考えられるため古代の遺構である可能性が高い。

RD182土坑

楕円形を呈する土坑である。

北側底面にやや窪みが認められる。

埋土はシルト主体であるが、地山ブロックが混入する。

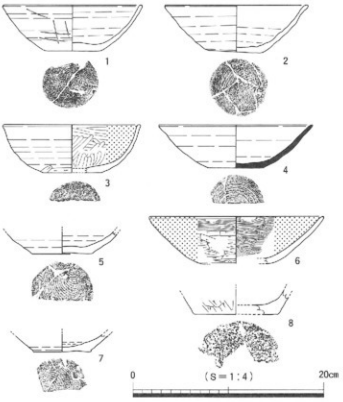
遺物の出土はなく、時期および性格は不明である。

RD179・180土坑出土遺物（第35図）

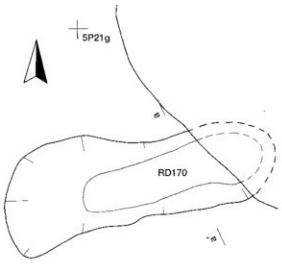
1は内外面黒化処理された土師器壺である。RD180土坑埋土より出土した。

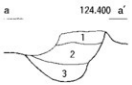
2はRD179土坑埋土からまとまって出土した弥生土器甕である。体部には縄文が施され、上半の肩部には鋸歯状の山形沈線文が2条廻る。2条の鋸歯状沈線の上にはそれぞれ文様帯があり、平行沈線文が4～5条廻る。

外面にはススが、同じく内面にはコゲが分厚く付着しており煮沸形態であったと考えられる。多条沈線文と鋸歯状山形沈線文の文様構成および器形は、青森県の田舎館式土器でみられることから田舎館式あるいは並行期の土器であると考えられる。したがって、弥生中期中葉頃に属すると推定される。

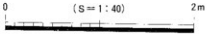


第31図　RG097・098溝跡出土遺物

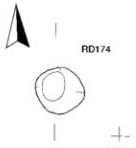


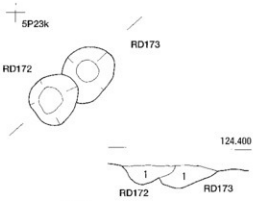


RD170
1. 7.5YR3/4 暗褐色シルト（小礫多く含む RA069のカマドソデ部分と重なる）
2. 10YR3/4 暗褐色シルト（粗砂粒多く含むが礫含む）
4. 10YR2/1 黒色シルト（細粒砂～小礫含む地山ブロック多く含む）

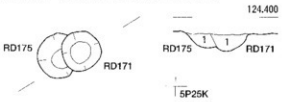


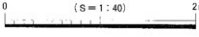
第32図　RD170土坑



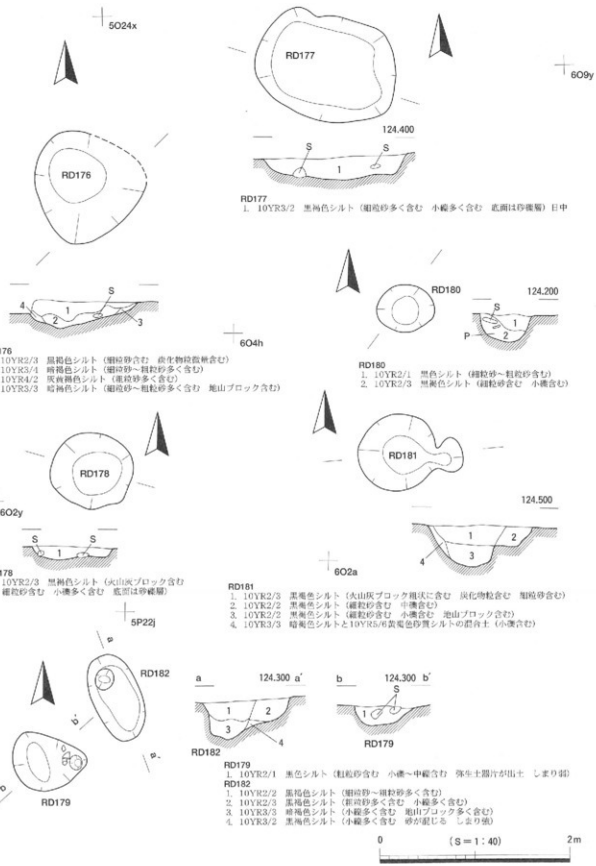


RD171
1. 10YR2/1 黒色シルト（細粒砂多く含む）
RD175
1. 10YR2/3 黒褐色シルト（細粒砂含む小礫多く含む）

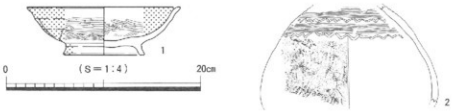




第33図　RD171～175土坑



第34図　RD176～182土坑



第35図　RD179・180土坑出土遺物

5. Ⅳ区の遺構と遺物

Ⅳ区は、第18次調査区西端に位置し、概ね台形を呈する。面積は約2,200㎡を測る。この調査区北壁は、本宮熊堂B遺跡第15次調査区と、西端はⅡ区、北壁は本宮熊堂B遺跡第20次調査区とそれぞれ接する。調査区を南北に分断するように旧河道が存在する。

RA073竪穴住居跡（第26図、写真図版31）

調査区中央やや東寄り、２Ⅰ区南西隅に位置する。ＲＡ074と重複し、ＲＡ074によって切られている。

検出面は第１層直下、標高128.800mを測る。この検出面は、木の根の浸食を受けているため、やや凹凸の著しい面であった。

平面形態は、ほぼ方形を呈するものと思われる。

規模は、短軸である南北長6.11m、長軸である東西長は推定6.65m、深さ22.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下２層のシルトからなる。

東側壁は、南半がＲＡ074に切られているためほとんど残存していない。北半は旧河道に及んでおり、立ち上がりが不明瞭であった。

カマドは住居北西に位置し、燃焼部焼土と煙道が遺存している。その他の施設は撹乱により不明確であった。

床面の貼床は、厚さ約５cmを測る。完掘したが、柱穴はみられなかった。

遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土師器を中心に出土した。

出土遺物はロクロを使用しない土師器坏や甕が出土した。１～５は土師器坏である。いずれも内面ミガキ、黒化処理されており、底部は丸底である。６～12は土師器甕である。いずれも頸部に明瞭な段を有する。

遺構、遺物より８世紀前半の竪穴住居であると考えられる。

RA074竪穴住居跡（第26図、写真図版31）

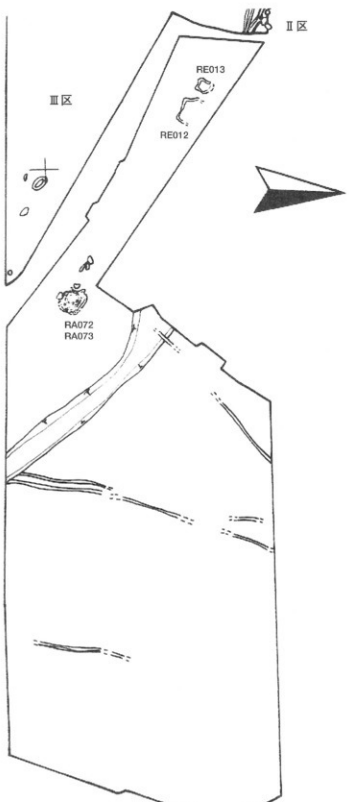
調査区中央やや東寄り、２Ⅰ区南西隅に位置する。ＲＡ073と重複し、ＲＡ073を切っている。

平面形態は、ほぼ方形を呈するものと思われる。

規模は、短軸である南北長4.10m、長軸である東西長は推定4.23m、深さ20.4cmを測る。

埋土は、概ね上・下２層のシルトからなる。

東側壁は、南半が良好に残存している。



第36図　Ⅳ区遺構配置（S＝1：600）

カマドは住居北西に位置し、燃焼部焼土と煙道が遺存している。その他の施設は撹乱により不明確であったが、ＲＡ073の焼土よりは検出面がやや高い。

出土遺物は土師器甕片が出土した。

RE012竪穴住居状遺構（第42図、写真図版22）

調査区北西、Sp17v付近に位置する。現代の撹乱によって北半は失われているが、南半は良好に残存している。

先述した通り撹乱が顕著であるため、北半の規模や形態は明らかではない。しかし、良好に残存する部分から推測すると平面形態は概ね方形を呈するものと思われる。

埋土は大別すると３層のシルト層からなり、最上層には火山灰ブロックを多く含む。

出土遺物は古代の土器が若干量出土している。

RE013竪穴住居状遺構（第42図、写真図版22）

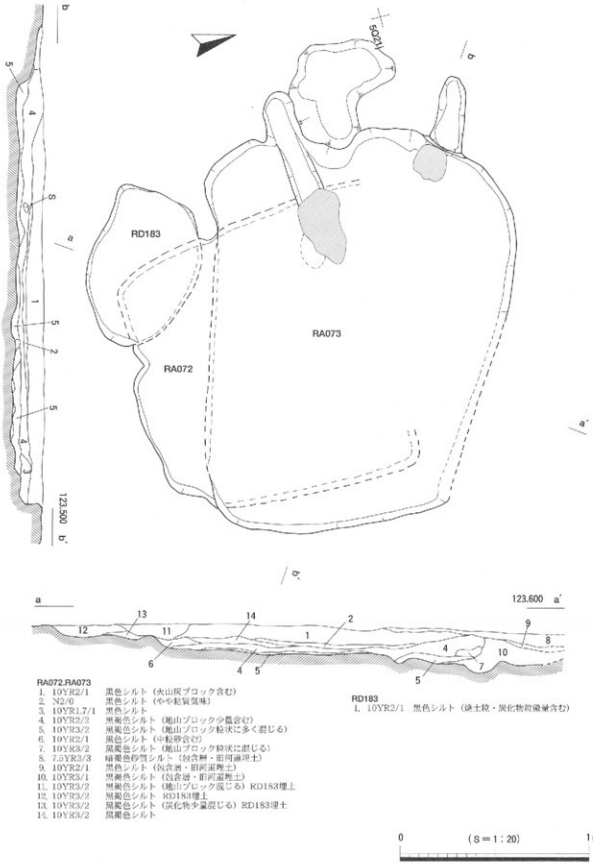
調査区北西Sp16v付近に位置する。現代の撹乱によって一部失われているが、その他は良好に残存している。

平面形態は方形を呈し、規模は南北長1.92m、東西長1.85m、深さ15cmを測る。

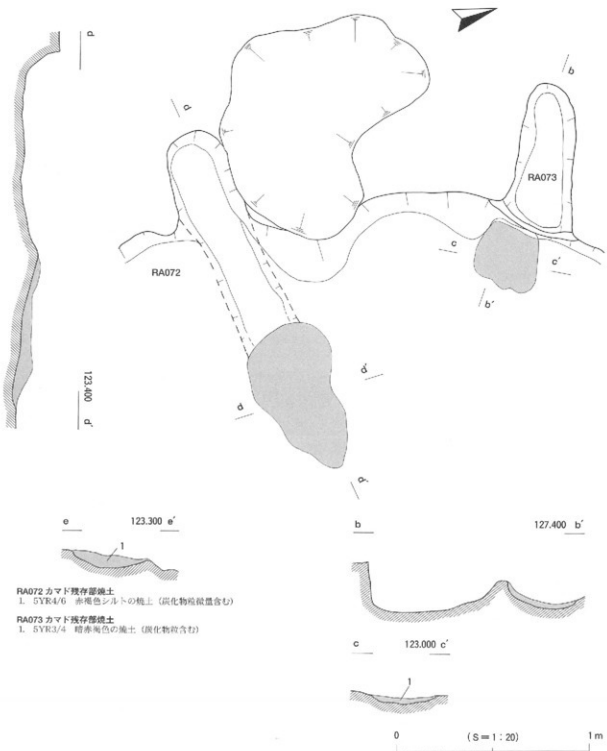
埋土は大別すると３層のシルト層からなり、最上層には火山灰ブロックを多く含む。埋土下層から床面にかけて拳大の礫が多量に出土した。

出土遺物は古代の土器が若干量出土した。

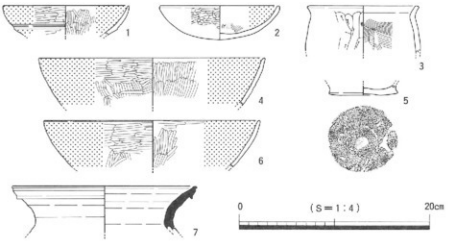
遺構・遺物より平安時代の遺構であると考えられる。



第37図　RA072・073竪穴住居、RD183土坑



第38図　RA072・073竪穴住居カマド



第39図　RA072・073竪穴住居出土遺物

RD184土坑（第45図、写真図版23）

Ⅳ区南端６Ｏ区の北、遺構北東隅が６Ｏ１ｈの区画点の45cm南に位置する。検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

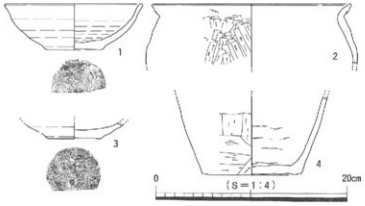
遺構の大半はＲＤ160土坑によって切られており、さらに南側は調査区外へと続く。切り合い関係からこの土坑は、ＲＤ160土坑より古い遺構であると考えられる。

土坑の平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。

平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトの単一層が堆積しており、十和田ａ降下火山灰をブロック状に若干量含む。

土坑底面付近で多くの土器が出土した。この土坑の性格は不明であるが、埋土中の火山灰より平安時代の遺構であると考えられる。



第40図　RD183土坑出土遺物

RD185土坑（第44図）

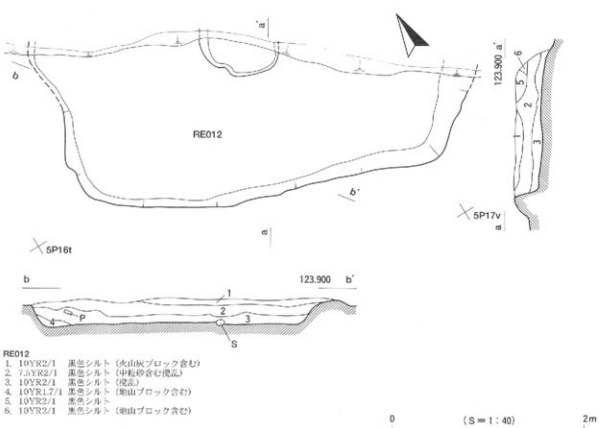
Ⅳ区南端60区の北、遺構北東隅が601hの区画点の45cm南に位置する。検出面は、第2層上面のほぼ平坦な面で、標高124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

土坑の平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。

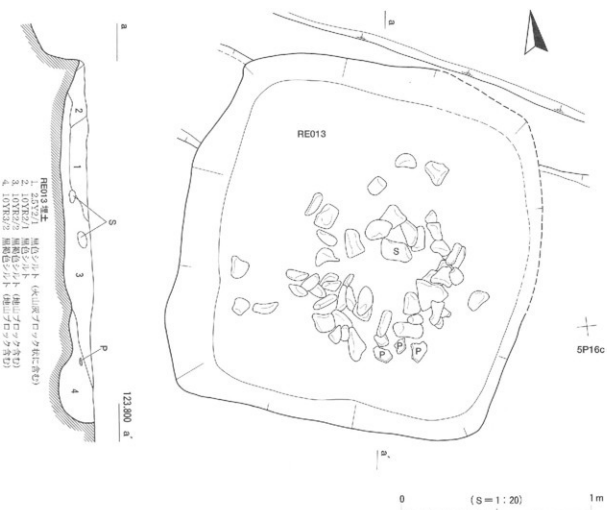
底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトがほぼ水平に堆積しており、概ね3層からなる。中・上層のシルトには十和田a降下火山灰をブロック状に若干量含む。

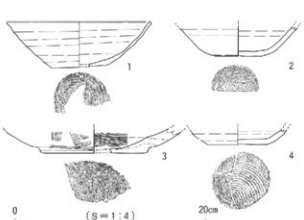
この土坑の性格は不明であるが、埋土中の火山灰より平安時代の遺構であると考えられる。



第41図　RE012竪穴住居状遺構



第42図　RE013竪穴住居状遺構



第43図　RE012・013 竪穴住居状遺構出土遺物

RD186土坑（第44図）

Ⅳ区南端６０区の北、遺構北東隅が６０１ｈの区画点の45cm南に位置する。検出面は、第２層上面のほぼ平坦な面で、標高 124.120mを測る。この面は、近現代の耕作によって水平に削平されているものとみられる。

遺構の大半はＲＤ160土坑によって切られており、さらに南側は調査区外へと続く。切り合い関係からこの土坑は、ＲＤ160土坑より古い遺構であると考えられる。

土坑の平面形態は、楕円～不整な方形を呈する。

平面規模は長軸1.45m、短軸は指定値で87cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側が緩やかに深さを増している。土坑の深さは北端で18cm、南端で21cm、最深部で23cmを測る。

土坑の埋土は、黒褐色のシルトの単一層が堆積しており、十和田ａ降下火山灰をブロック状に若干量含む。

なお、この土坑の性格は不明であるが、埋土中の火山灰より平安時代の遺構であると考えられる。

RG102溝跡（第46図、写真図版21）

幅71cmを測り、南北を指向する。

古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため古代以降の溝であると考えられる。なお、第14次調査区に続いている。

遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明であるが、軸方向や埋土より近現代のものである可能性が高い。

RG124溝跡（第46図、写真図版23）

幅62cmを測り、南北を指向する。古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため古代以降の溝であると考えられる。

遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明であるが、軸方向や埋土より近現代のものである可能性が高い。

RG125溝跡（第46図、写真図版23）

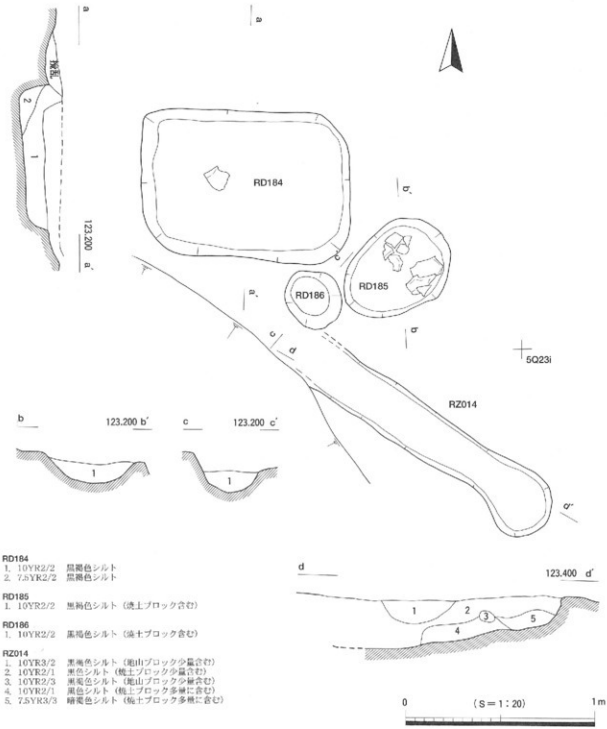
幅64cmを測り、南北を指向する。古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため古代以降の溝であると考えられる。

遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明であるが、軸方向や埋土より近現代のものである可能性が高い。古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため中世以降の溝であると考えられる。

RG126溝跡（第46図、写真図版23）

幅42cmを測り、南北を指向する。古代の遺構埋土とは異なり、耕作土によって埋没しているため中世以降の溝であると考えられる。

遺物は出土しなかった。



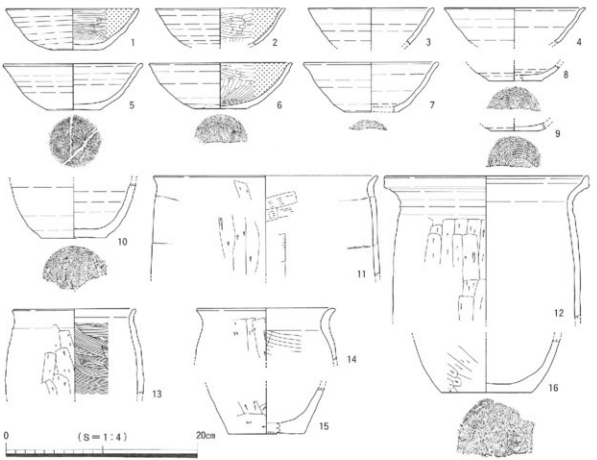
RD184
1. 10YR2/2　黒褐色シルト
2. 7.5YR2/2　黒褐色シルト

RD185
1. 10YR2/2　黒褐色シルト（焼土ブロック含む）

RD186
1. 10YR2/2　黒褐色シルト（焼土ブロック含む）

RZ014
1. 10YR3/2　黒褐色シルト（地山ブロック少量含む）
2. 10YR2/1　黒色シルト（焼土ブロック少量含む）
3. 10YR2/3　黒褐色シルト（地山ブロック少量含む）
4. 10YR2/1　黒色シルト（焼土ブロック多量に含む）
5. 7.5YR3/3　暗褐色シルト（焼土ブロック多量に含む）

第44図　RD184～186土坑、RZ014その他遺構



第45図　RD184～186土坑、RZ014その他遺構出土遺物

6. 遺構外出土遺物（第47～49図、写真図版34～37）

攪乱など遺構以外から出土した土器をまとめて報告する。

古代以前の土器はいずれも縄文時代晩期～弥生時代である。晩期の土器と弥生土器はいずれも破片であるため峻別が困難であるが、3・6・11などは地文や形態的特徴から弥生土器である可能性が考えられる。

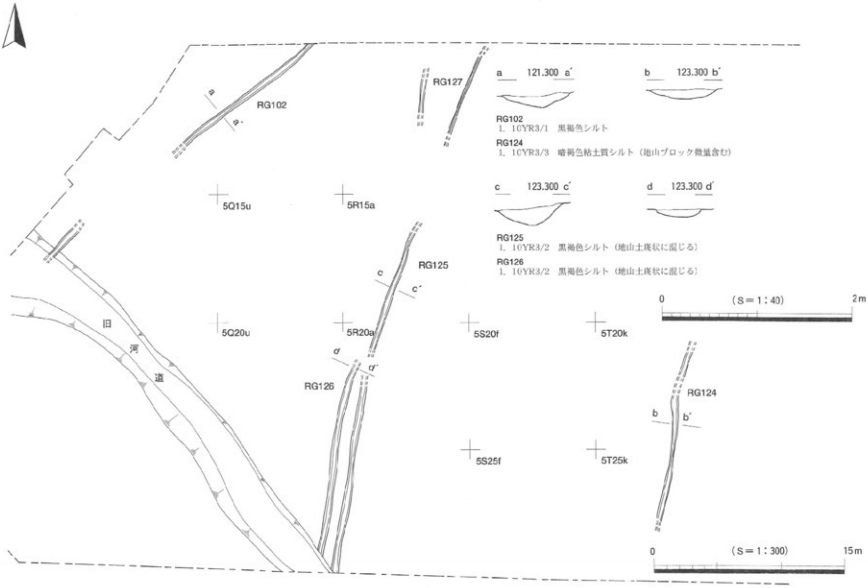
その他は晩期末の大洞A～A'に相当すると考えられる。

12・15の須恵器を除き全て土師器である。

1～29は坏である。4は口縁部に墨書が認められるが、文字か記号か判読できない。

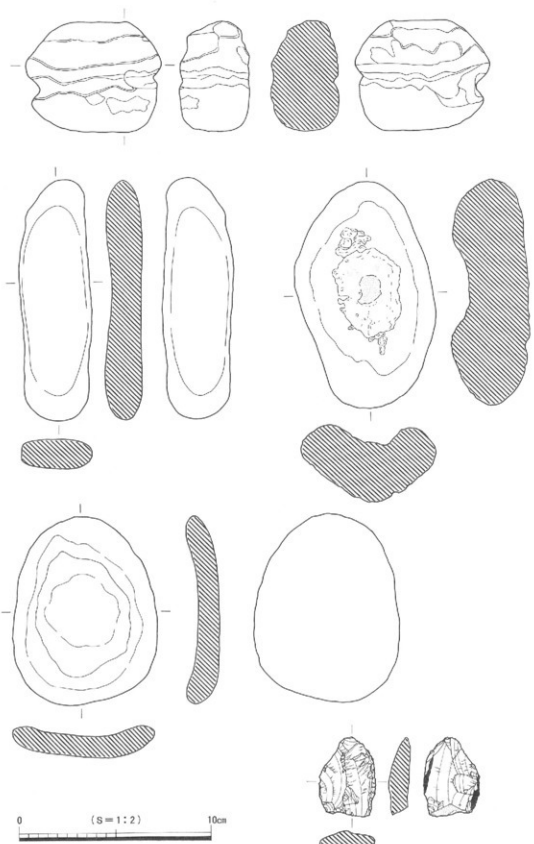
30～39は甕である。30は球胴である。31・32・35・38・39は口縁部に稜あるいは段が明瞭である。

概ね8世紀前半と9世紀後半～10世紀初頭の2時期の土器である。　（福島）

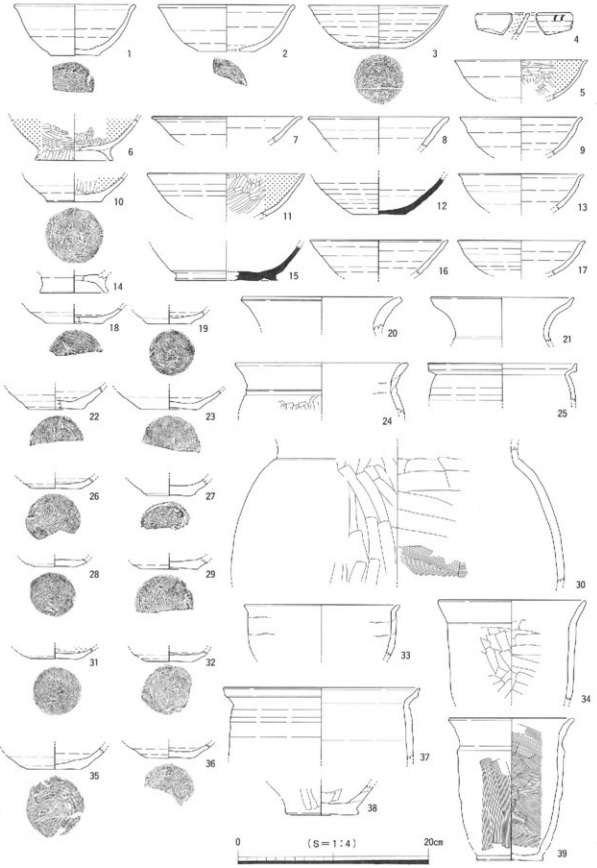


第46図 RG102・124～127溝跡

第47図　遺構外出土遺物（古代以前）



第48図　遺構外出土遺物（古代以前）



第49図　遺構外出土遺物（古代以降）

表5　遺物観察表（土器）

実測No	挿図No	写真図版No	出土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	色調 外面	内面	断面	備考
1	23-1	57	RA069 RA070	土師器	甕		19.8	7.0	31.2	0.6	ケズリ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	5YR7/6 橙色	
2	23-4	47	RA069 RA070	土師器	坏	80	14.6	6.8	5.7	1.0	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
3	23-3	48	RA069	土師器	高坏	95	16.2	8.2	6.3	1.1	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/6 橙色		
4	23-12	52	RA069	土師器	甕		(15.7)	—	(13.5)	(0.8)			7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR5/6 明褐色	7.5YR4/3 褐色	
5	23-5	51	RA069	土師器	坏	90	14.45	5.6	4.5	1.1	回転ナデ	ミガキ	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR2/1 黒色	7.5YR5/4 にぶい褐色	
6	23-1	53	RA069	土師器	坏		(14.1)	6.1	3.6	0.7	回転ナデ	回転ナデ後ミガキ	7.5YR6/6 橙色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR7/6 橙色	
7	23-2	46	RA069	土師器	坏	40	13.1	5.0	4.9	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/8 黄橙色	5YR7/6 橙色	5YR6/1 褐灰色	
8	23-8	45	RA069	土師器	坏	60	14.4	5.3	5.2	0.9	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	
9	23-6	49	RA069	土師器	坏	50	14.3	5.8	4.8	0.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	
10	23-18	56	RA069	土師器	甕		—	9.2	10.6	0.6	ケズリ	ハケメ・ナデ	5YR7/6 橙色	5YR5/8 明赤褐色	7.5YR6/4 にぶい褐色	
11	23-10	44	RA069	土師器	坏	85	14.8	44.0	4.5	0.7	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	
12	23-16	54	RA069	土師器	甕		23.2	10.4	32.4	0.8	回転ナデ後ヘラミガキ	回転ナデ?ハケメ	5YR6/6 橙色	5YR5/8 明赤褐色	5YR6/8 橙色	
13	23-11	55	RA069	土師器	甕		(19.5)		(16.5)	0.6	ケズリ	ハケメ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	
14	23-9	50	RA069 RA070	土師器	坏	70	15.0	5.5	4.7	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/8 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
15	43-1	92	RE013	土師器	坏	85	13.1	5.5	4.9	0.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
16	28-1	72	RA071	土師器	坏	95	14.0	5.8	4.9.0	0.9	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
17	28-3	71	RA071	土師器	坏	75	14.3	5.8	4.4	0.7	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒褐色	7.5YR7/6 橙色	
18	39-2	84	RA072?3	土師器	坏	95	12.6	—	3.6	0.7	ミガキ	ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
19	39-5	88	RA072?3	土師器	甕	5		(7.2)	—	0.85	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙色	7.5YR3/1 黒褐色	5YR6/4 にぶい橙色	
20	31-3	79	RG097	土師器	坏	40	14.2	6.0	5.1	0.4			5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/3 にぶい褐色	
21	31-8	82	RG097	土師器	甕	5	—	(8.8)	(2.7)	0.85			7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
22	31-6	78	RG097	土師器	坏		(18.1)	—	5.05	0.6	ケズリ後ミガキ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
23	31-2	76	RG098	土師器	坏	85	15.0	5.6	4.9	0.75	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	10YR6/2 灰黄褐色	
24	31-5	80	RG098	土師器	坏	15	—	6.2	(2.4)	0.6	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	10YR6/2 灰黄褐色	
25	31-7	81	RG097	土師器	坏	10	—	(6.0)	(1.9)	0.6			7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	
26	31-1	75	RG097	土師器	坏	50	14.4	5.5	4.9	0.9	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	
27	13-1	1	RD159	土師器	坏	35	(15.3)	(6.1)	5.6	0.9	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	

実測No	挿図No	写真図版No	出土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	備考
28	13-2	2	RD159	土師器	高台付坏	5	－	(8.2)	(2.1)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/8 橙色	7.5YR7/6 橙色	
29	13-4	3	RD159	土師器	坏			6.4	(2.5)	0.45	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR6/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	
30	13-3	4	RD167	土師器	坏	25	－	5.2	(2.0)	(0.5)			7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
31	35-1	83	RD180	土師器	高台付坏	25	(15.8)	(8.4)	5.1	1.0	ミガキ	ミガキ	10YR1.7/1 黒色	10YR1.7/1 黒色	10YR4/1 褐灰色	
32	40-1	95	RD183	土師器	坏	15	(14.4)	(6.2)	4.8	1.0	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	
33	40 4	97	RD183	土師器	甕	20	－	(10.4)	(8.2)	1.0	ケズリ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
34	40-2	98	RD183	土師器	鉢	5	(28.0)	－	－	0.9	ヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/8 橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	
35	40-3	96	RD183	土師器	坏	15	－	5.6	－	1.1	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
36	47-39	121	遺構外	土師器	甕		(13.1)	6.9	15.0	0.7	ハケメ	ハケメ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR5/2 灰褐色	5YR6/2 灰褐色	
37	47-33	137	遺構外	土師器	甕	10	(16.2)	－	(5.1)	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	5YR7/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
38	47-28	146	遺構外	土師器	坏		－	4.2	(9.5)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	
39	47-11	132	遺構外	土師器	坏	15	(16.6)		(4.7)	0.5	回転ナデ	ミガキ	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR1.7/1 黒色	5YR5/4 にぶい赤褐色	
40	47-19	152	遺構外	土師器	坏	5	－	(5.4)	(1.9)	0.65	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
41	47-7	128	遺構外	土師器	高台付坏	15	(15.7)		(2.7)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
43	47 8	147	遺構外	土師器	坏	20	－	5.8	(1.62)	0.3	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
44	45-1	99	N 区	土師器	坏	80	14.8	－	4.3	0.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
45	47-26	144	遺構外	土師器	坏	25	－	4.9	(1.2)	0.5			5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	
46	28-2	69	RA071	土師器	坏		－	5.8	3.7	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
47	47-25	139	遺構外	土師器	甕	5	(15.8)	－	(4.1)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/6 明赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	5YR5/2 灰褐色	
48	47-6	117	遺構外	土師器	高台付坏		－	8.3	4.4	0.4	ミガキ	ミガキ	2.5YR4/1 黄灰色	10YR3/1 黒褐色	5YR5/1 灰褐色	
49	47-8	131	遺構外	土師器	坏	20	(14.5)	－	(3.3)	0.55	回転ナデ	回転ナデ	6YR5/4 にぶい赤橙色	5YR7/6 橙色	5YR8/4 淡橙色	
50	47 13	127	遺構外	土師器	坏	20	(13.0)	－	(3.75)	0.5			7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
51	47-29	145	遺構外	土師器	坏	10	－	(6.0)	(1.3)	0.7			7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	
52	47-23	120	遺構外	土師器	坏	20	－	5.8	2.1	0.6	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	
53	47-36	148	遺構外	土師器	坏	25	－	4.55	(1.55)	0.4			5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	
54	47-21	136	遺構外	土師器	甕	15	(15.0)	－	(4.7)	0.6			5YR7/6 橙色	5YR7/4 にぶい橙色	10YR6/2 灰黄褐色	
55	47-32	151	遺構外	土師器		25	－	4.7	(1.2)	0.5			7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
56	47 31	149	遺構外	土師器		25	－	(5.0)	(1.2)	0.4	回転ナデ	ヘラミガキ	5YR7/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	5YR7/4 にぶい橙色	
57	47-24	138	遺構外	土師器	甕	10	(18.0)	－	(5.4)	0.7	ヘラケズリ		10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	5YR6/4 にぶい橙色	

実測No	挿図No.	写真図版	出土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	備考
58	47-10	119	遺構外	土師器	坏	30	—	(5.8)	(2.7)	0.5			10YR8/4 浅黄橙色	10YR2/1 黒色	10YR7/4 にぶい黄橙色	
59	47-22	143	遺構外	土師器	坏		—	5.6	(2.44)	0.8			5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
60	47-27	153	遺構外	土師器	坏		—	(5.4)	(1.9)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	
61	47-20	130	遺構外	土師器	甕	10	(16.6)	—	(3.65)	1.0			5YR8/4 浅橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
62	47-14	142	遺構外	土師器	高台付坏		—	(7.2)	(1.9)	0.8			7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
63	47-4	133	遺構外	土師器	坏		—	—	2.3	0.55			7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	黒斑
64	47-9	125	遺構外	土師器	坏	40	(12.9	—	4.0	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	
65	47-2	126	遺構外	土師器	坏	25	(14.4)	(5.8)	(4.9)	0.4			5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい橙色	
66	47-35	123	遺構外	土師器	坏	20	—	5.5	(2.4)	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい橙色	
67	47-38	122	遺構外	土師器	甕	20	—	6.4	(3.2)	0.9	ヘラナデ	ヘラナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
68	47-3	116	遺構外	土師器	坏	45	(14.5)	5.0	4.5	0.3	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	5YR7/6 橙色	5YR8/4 淡橙色	
69	47-34	140	遺構外	土師器	甕	10	(15.3)	—	(10.5)	0.8	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	5YR6/4 にぶい橙色	
70	47-30	150	遺構外	土師器	甕	15	—	—	13.5	0.95			7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR3/1 黒灰色	
72	47-1	115	遺構外	土師器	坏	20	(12.8	5.0	5.1	0.6	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	
73	47-17	134	遺構外	土師器	坏	20	(13.2)	—	(3.6)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR5/2 灰褐色	
74	47-5	129	遺構外	土師器	坏	20	(14.0)	—	(4.15)	0.35			7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR4/1 褐灰色	10YR7/4 にぶい黄橙色	
75	47-37	141	遺構外	土師器	甕	5	(20.8)	—	(7.6)	0.75	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
76	26-6	64	RA070	土師器	坏	20	(14.0)	—	(3.8)	0.5	回転ナデ	ミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	
77	23-17	61	RA069	土師器	甕	10	—	8.8	2.7	0.1			5YR7/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
78	23-13	60	RA069	土師器	甕	10	(20.6)	—	(5.75)	0.5	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
79	23-7	59	RA069	土師器	坏		(14.5)	—	3.9	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	
80	23-14	58	RA069	土師器	甕		(15.0)	—	4.0	0.3	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	
81	26-4	66	RA070	土師器	坏	20	—	(5.4)	(2.8)	(0.4)			5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
82	26-3	67	RA070	土師器	坏	25	—	7.0	(3.1)	0.5			7.5YR6/6 橙色	5YR6/6 明赤褐色	7.5YR6/6 橙色	
83	26-1	62	RA070	土師器	坏	25	(14.3)	(5.6)	(5.0)	0.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
84	26-2	65	RA070	土師器	坏	35	(13.2)	(5.4)	(4.45)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	
85	43-2	94	RA070 RE013	土師器	坏	25	—	4.8	(3.2)	0.5			5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
86	43-4	93	RA070 RE013	土師器	坏	25	—	5.9	(1.7)	0.6			5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	
87	43-3	91	RA070	土師器	鍋蓋	15	—	(10.4)	(2.6)	1.2	ハケメ	ハケメ・ナデ	7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR3/4 にぶい褐色	10YR5/1 褐灰色	

実測No.	挿図No.	写真図版No.	出土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	備考
88	28-7	68	RA070 RA071	土師器	甕	60	—	(11.3)	(29.1)	0.6	回転ナデ・ヘラナデ	ミガキ・ヘラナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/1 褐灰色	
89	28-6	73	RA071	土師器	坏	15	—	(6.9)	(1.45)	0.9	不明	ヘラナデ	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR2/1 黒色	10YR7/4 にぶい黄橙色	
90	39-6	87	RA071, 072,073	土師器	坏		(22.4)	—	5.0	0.4	ミガキ	ミガキ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
91	39-1	85	RA072, 073	土師器	坏		(13.0)	—	3.1	0.4	ミガキ	ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	
92	39-4	86	RA072, 073	土師器	坏		(23.4)	—	5.2	0.4	ミガキ	ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
93	39-3	89	RA072, 073	土師器	甕		11.6	—	5.1	0.6	ケズリ	ハケメ	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/1 褐灰色	
94	31-4	77	RA097	須恵器	坏	20	16.0	5.8	4.55	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/1 灰色	5YR6/1 灰色	5YR6/1 灰色	
95	26-5	63	RA070,071, RG097	須恵器	坏	90	14.7	5.6	4.4	0.7	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙色	2.5YR5/6 明赤褐色	10YR4/1 褐灰色	
96	28-4	70	RA071	須恵器	坏	90	14.1	6.0	(4.7)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/1 灰白色	10YR6/1 褐灰色	10YR6/1 褐灰色	
97	47-15	154	遺構外	須恵器	高台付坏	10	—	(10.7)	(3.7)	0.6	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	2.5YR6/6 橙色	
98	47-12	118	遺構外	須恵器	坏	45	—	5.4	4.0	0.5	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/1 灰白色	10YR7/1 灰白色	
99	28-5	74	RA071	須恵器	坏		(15.2)	—	4.0	0.4	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR5/1 黄灰色	2.5YR4/1 黄灰色	2.5YR4/1 黄灰色	
100	39-7	90	RA072, 073	須恵器	蓋		(19.1)	—	5.0	0.8	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/1 褐灰色	7.5YR5/1 褐灰色	7.5YR5/1 褐灰色	
101	47-16	124	遺構外	須恵器	坏		(14.5)	—	3.7	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	5YR5/6 明赤褐色	5YR4/1 褐灰色	
102	45-10	102	Ⅳ区	土師器		20	—	6.75	(5.8)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	
103	45-13	113	Ⅳ区	土師器	甕		(12.7)	—	9.0	0.6	ケズリ	ハケメ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/3 にぶい橙色	
104	45-3	106	Ⅳ区	土師器	坏		(13.2)	—	4.0	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	
105	45-6	100	Ⅳ区	土師器	坏	45	(15.0)	(5.4)	(4.9)	0.6	回転ナデ	ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/1 褐灰色	
106	45-11	112	Ⅳ区	土師器	甕		(23.2)	—	10.65	5.5	ケズリ	ハケメ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	
107	45-14	110	Ⅳ区	土師器	甕		(14.3)	—	5.4	0.4	ケズリ	ハケメ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
108	45-2	105	Ⅳ区	土師器	坏		(13.5)	—	3.95	3.5	回転ナデ	ミガキ(ヨコ・タテ)	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR8/3 浅黄橙色	
109	45-15	104	Ⅳ区	土師器	甕	25	—	7.6	(4.9)	1.0	ヘラケズリ	ナデ	5YR6/3 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
110	45-16	114	Ⅳ区	土師器	甕		—	(9.4)	(5.7)	1.0	ヘラケズリ	ナデ	5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
111	45-8	108	Ⅳ区	土師器	坏	10	—	(5.4)	(1.7)	0.5			5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
112	45-5	101	Ⅳ区	土師器	坏	75	(14.6)	5.6	4.9	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/8 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
113	45-4	107	Ⅳ区	土師器	坏	30	(14.7)	—	(3.8)	0.4			7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	
114	45-12	111	Ⅳ区	土師器	甕	15	(21.4)	—	(15.2)	0.7	回転ナデ後ヘラケズリ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
115	45-7	103	Ⅳ区	土師器	坏	40	14.2	5.6	5.25	0.4			5YR7/6 橙色	2.5YR7/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
116	45-9	109	Ⅳ区	土師器	坏	10	—	(5.0)	(0.9)	(0.6)			7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	

実測No	挿図No.	写真図版No.	出土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	備考
1	19-2	37	RG098	土師器	坏		12.4	—	3.0	0.3	回転ナデ	ミガキ	7.5YR8/4 浅黄橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
19	19-11	42	RG098	土師器	坏			(5.2)	1.6	0.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/6 橙色	2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR6/6 橙色	
20	19-4	40	RG098	土師器	坏	25	—	(7.0)	2.3	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR4/3 褐色	5YR6/4 にぶい橙色	
21	19-3	38	RG098	土師器	坏	35	(13.0)	(3.6)	5.0	(0.5)	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	10YR5/2 灰黄褐色	
25	19-6	36	RG098	土師器	坏		—	5.8	2.3	0.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
28	19-10	33	RG097	土師器			—	(5.6)	1.6	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	
29	19-12	35	RG098	土師器	高台坏		—	(6.9)	2.0	0.6	回転ナデ	—	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
30	19-9	41	RG098	土師器	甕		—	(9.6)	2.5	0.6	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
35	19-5	32	RG097	土師器	坏		—	(4.5)	2.3	0.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	
38	19-1	39	RG098	土師器	坏		16.0	—	3.3	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	
39	19-8	34	RG097	土師器	坏	10	—	(6.7)	(1.6)	1.15	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR6/6 橙色	
40	16-25	13	RA100	土師器	甕	10	—	8.4	—	(0.7)	ヘラケズリ	ハケメ	10YR4/1 灰褐色	10YR4/1 灰褐色	10YR6/3 にぶい黄橙色	
41	16-16	2	RA100	土師器	高台坏		—	(8.0)	2.3	0.6	ミガキ	—	7.5YR4/1 灰褐色	7.5YR7/3 にぶい橙色	10YR8/4 浅黄橙色	
42	16-6	6	RA100	土師器	坏	95	15.1	7.5	4.2	0.7	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR5/1 褐灰色	
43	16-15	5	RA100	土師器	高台坏		(16.0)	(7.3)	5.0	0.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR7/6 橙色	2.5YR6/8 橙色	2.5YR6/6 橙色	
44	16-21	23	RA100	土師器	甕		(14.7)	—	9.0	0.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	
45	16-2	19	RA100	土師器	坏	30	(14.6)	—	—	(0.4)	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	
46	16-20	24	RA100	土師器	甕		(17.4)	—	5.5	0.5	ヘラケズリ	ハケメ	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
47	16-23	22	RA100	土師器	甕		—	(6.7)	(6.3)	(0.7)			5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR7/8 橙色	
48	16-7	8	RA100	土師器	坏		(14.3)	4.1	4.3	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	
52	16-17	10	RA100	土師器	高台坏		—	7.9	1.95	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR4/2 灰褐色	5YR7/4 にぶい橙色	
53a	16-26	11	RA100	土師器	甕								5YR5/3 にぶい赤褐色	2.5YR6/8 橙色	5YR7/6 橙色	53b と同一個体
53b	16-26	12	RA100	土師器	甕		24.8	—	24.7	0.9	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	53a と同一個体
56	16-14	22	RA100	土師器	坏		6.8	1.6	3.5	0.5	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR5/1 褐灰色	
58	19-7	43	RG098	土師器	坏		(6.0)	(2.0)	0.5		回転ナデ	ミガキ	5YR7/6 橙色	10YR2/1 黒色	5YR8/3 淡橙色	
60	16-24	25	RA100	土師器	甕		(18.6)	—	(9.0)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR2/1 黒色	5YR6/6 橙色	
61	16-8	4	RA100	土師器	坏	10	—	(5.8)	(3.2)	0.9	回転ナデ	回転ナデ	5YR8/4 淡橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
63	16-5	16	RA100	土師器	坏	25	(14.1)	(5.4)	(4.4)	0.7	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
64	16-22	26	RG081	土師器	甕		18.2	—	4.5	0.45	ヘラケズリ	ハケメ	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR3/3 にぶい赤褐色	5YR5/2 灰褐色	

実測No	挿図No	写真図版No	行土遺構	種別	器種	残存率(%)	法量(cm) 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	備考
65	16-19	27	RA100	土師器	甕		(11.2)	−	3.9	0.8	ヘラナデ	ハケメ	5YR4/2 灰褐色	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	
67	16-12	20	RA100	土師器	坏	10	−	(5.4)	(0.8)	0.9	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/3 にぶい赤褐色	5YR5/3 にぶい赤褐色	
70	16-9	21	RA100	土師器	坏		−	5.6	1.05	0.3	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
72	16-10	17	RA100	土師器	坏		−	5.0	1.45	0.3	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	
74	16-4	14	RA100	土師器	坏		12.8	−	3.6	0.45	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	
77	16-18	28	RA100	土師器	甕		(22.8)	−	6.6	0.6	ケズリ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	7.5YR5/4 にぶい橙色	
79	16-11	7	RA100	土師器	坏	15		4.9	(1.6)	0.8	回転ナデ	ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR7/4 にぶい橙色	
81	16-13	3	RA100	土師器	坏		−	4.5	2.25	3.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	
85	16-3	15	RA100	土師器	坏	15	(15.0)		(3.9)	(0.5)	回転ナデ	ミガキ	7.5YR7/6 橙色	10YR2/1 黒色	5YR7/4 にぶい橙色	
87	16-1	16	RA100	土師器	坏	10	12.1	−	−	0.45	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/4 にぶい橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	

挿図No.	写真図版No.	出土遺構	種　別	器　種	備　　考
9－5	155	RD168	縄文土器	小形深鉢	
9　4	156	RD168	縄文土器	小形深鉢	
35－2	157	RD161	弥生土器	壺	
9－6	158	RD168	縄文土器	浅鉢	赤彩
－	159	遺構外	縄文土器？		
47－7	160	遺構外	縄文土器	深鉢	
9－2	161	RD164	縄文土器	浅鉢	
－	162	遺構外	縄文土器？	深鉢	
47-15	163	遺構外	縄文土器？	注口土器？	
－	164	遺構外	縄文土器	深鉢	
47-14	165	遺構外	弥生土器？	甕	
47-10	166	遺構外	縄文土器？	浅鉢	
47－6	167	遺構外	弥生土器？	甕	
9－1	168	RD162	縄文土器	浅鉢	
－	169	遺構外	縄文土器	浅鉢	
47 11	170	遺構外	弥生土器	壺	
47－5	171	遺構外	縄文土器？	浅鉢	
47－2	172	遺構外	縄文土器？	浅鉢	
47-13	173	遺構外	縄文土器？	浅鉢	
－	174	遺構外	弥生土器？		
47－9	175	遺構外	縄文土器？	深鉢	
47－3	176	遺構外	弥生土器？	甕	

Ⅴ．調査のまとめ

1．縄文～弥生時代

今回の調査で出土した古代以前の遺構と遺物を概観する。縄文時代晩期は、主に大洞C$_2$～A式にかけての遺構と遺物を検出した。

遺構は7基の土坑である。各土坑は規模や形態、埋土など多くの類似点がみられ、ほぼ同じ時期に形成された土坑群であると考えられる。土器を埋納したと考えられる土坑は、当時の祭祀的な性格を有するものであると考えられる。出土した浅鉢には、赤色顔料が認められることからもその証左となり得るであろう。

また、土坑群の位置は今調査区の中でⅠ区に集中して分布している。これまでの熊堂B遺跡の調査では、縄文時代晩期の遺構および遺物あまり確認されていない。しかし、熊堂B遺跡が所在する段丘上より一段低い熊堂A遺跡では縄文時代晩期の遺構・遺物が多くみられる。熊堂B遺跡周辺では、狭い範囲で縄文時代晩期の生活圏が展開していたのであろう。

他の土坑群について礫の埋置などから墓坑群と考えられ、調査区北に隣接する本宮熊堂A遺跡の晩期集落との関係が注目される。本宮熊堂A遺跡の集落の時期と大差がないことからも両遺跡での遺構はほぼ併存していたと考えられる。今後周辺での当該期墓壙群の類例が増加することを期待する。

出土した縄文土器は、大洞A式のものが主体で精製品が目立つ。

また、弥生時代中期の土器が遺構から出土したことは当該期の資料に乏しい周辺域に貴重な類例を提示することができた。

2．奈良～平安時代

今回調査した結果、古代に属する竪穴住居跡6棟（奈良時代2棟、平安時代4棟）、竪穴住居状遺構2棟、土坑21基、溝跡2条を検出した。

6棟の竪穴住居群を立地から概観すると、地形によって時期的な違いがみられる。特に、本宮熊堂B遺跡周辺は南北方向において階段状に段丘崖が形成されている。最も高い南側の上段には稲荷遺跡、中段には本宮熊堂B遺跡が立地している。北側の下段には本宮熊堂B遺跡と熊堂A遺跡が立地している。

また、各段の境には、古代以前と考えられているいわゆる旧河道が帯状に存在する。今回調査した本宮熊堂B遺跡（第18次調査）は、この中段と下段に調査区が跨っており、この中段の端部と下段の両方で古代の竪穴住居を検出した。

今回の調査では、中段の竪穴住居（4棟）は主に平安時代に属し、下段には奈良時代の竪穴住居（2棟）が存在する。この傾向は、本宮熊堂B遺跡（第14次調査）でも同様である。この事実は、奈良時代と平安時代で、居住域がそれぞれやや異なる立地であることを示している。すなわち、比較すると奈良時代は、やや低い位置に居住域が展開し、平安時代はやや高い位置に展開するとみられる。この時期的な居住域の立地の変化は、現段階では要因不明であるが、奈良時代から平安時代にかけて何らかの要因で低い位置から高い位置に移ったのであろう。

また、下段の旧河道より北には竪穴住居等の古代に属する遺構は検出されていない。よって、熊堂B遺跡における古代の居住域は、平安時代中心の中段から奈良時代中心の下段旧河道南側までの間に収まっていると言うことができる。

3. まとめと今後の課題

これまで、盛南開発に伴う発掘調査では、縄文時代に属する遺構・遺物は数少ない傾向にある。特に、遺構は陥し穴等が多く、土器など明確な時期を特定できる遺物の出土は稀である。このような状況であるため、今回の調査で検出した晩期の土坑群や晩期の土器は本宮熊堂A遺跡出土のものと合わせて良好な資料である。これまでの調査で検出された時期不明の遺構にも縄文時代晩期のものが存在するのかもしれない。

また、これまで盛南開発に伴う発掘調査では、古代に属する多くの竪穴住居が確認されてきた。そして、集落の復原や集落のあり方について様々な視点から論じられてきた。特に、この本宮熊堂B遺跡は近年調査が進展し、古代に関しては概ね集落の全容が明らかになりつつある。

本宮熊堂B遺跡における古代集落の特徴として、以下のことが挙げられる。

1. 奈良時代（8世紀代）の住居群と平安時代（9世紀代）の住居群がまとまってみられる。
2. 奈良時代の集落は遺跡全体の中で、主に段丘による地形変化点から相対的な低地部分に展開する。
3. 奈良時代の住居群は1～3棟程度のまとまりで点在し、今回の調査では2棟が切り合う形で旧河道沿いのやや低地に立地する。
4. 平安時代の集落は遺跡全体の中で、主に段丘による地形変化点から相対的な微高地部分に展開する。
5. 平安時代の住居群は3～10棟程度のまとまりで密に分布する。

以上の集落の特徴から奈良時代と平安時代の各集落は同一の段丘上に立地しながらもミクロではそれぞれ立地が異なる。この理由については想像の域を出ないが、耕作地などの生産域が9世紀以降に低地に広がり、そのため居住域は微高地へ展開していったのではないだろうか。この展開は本宮熊堂B遺跡のみに限られたことではなく、同様の傾向は1km南に台太郎遺跡でもみられるようである。居住立地の画期について現段階では、遺跡近くに存在する志波城の成立と大きく関わるものと考えたい。

今後は同様な画期を有する周辺の集落も検討に加え、当地域一帯における古代集落の動向を考えていく必要があろう。

（福島）

Ⅵ. 考　察

平安時代における墓壙　―盛南開発地域を中心に―

1. はじめに

遺跡の発掘調査において、普遍的かつ数多く検出される遺構の一つに土坑と呼ばれる遺構がある。しかし、この土坑という遺構は、単なる穴というだけで性格が不明なものがその大半を占めるというのが現状である。このような性格不明の遺構を整理し、その特徴を見出すことによって本来の性格を想定することは考古学的に有意義であると考える。特に墓壙は、様々な要因により他の遺構と峻別することが可能な場合がある。

本書で報告した本宮熊堂Ｂ遺跡第18次の発掘調査では、平安時代の墓壙と考えられる土壙を１基検出した。この遺構を調査した結果を契機として、本宮熊堂Ｂ遺跡周辺でおこなわれているいわゆる盛南開発に伴う発掘調査の調査結果を中心に当該期、当該地域における墓壙について若干の考察をおこないたい。

2. 墓壙の類例

今回類例として掲げる墓壙は、必ずしも「埋葬施設」として厳密に報告されていない。これは、人骨の出土など確たる証拠がないためであろう。当地域での人骨の出土は条件的に望めない。しかし、次に列挙する条件を満たすものを墓壙として扱った。

①土壙の形態が不整でない。

②遺構埋土に人為的に埋め戻されたような痕跡が認められる。

③底面に副葬品と考えられる遺物が出土し、据え置かれたような出土状況がみられる。

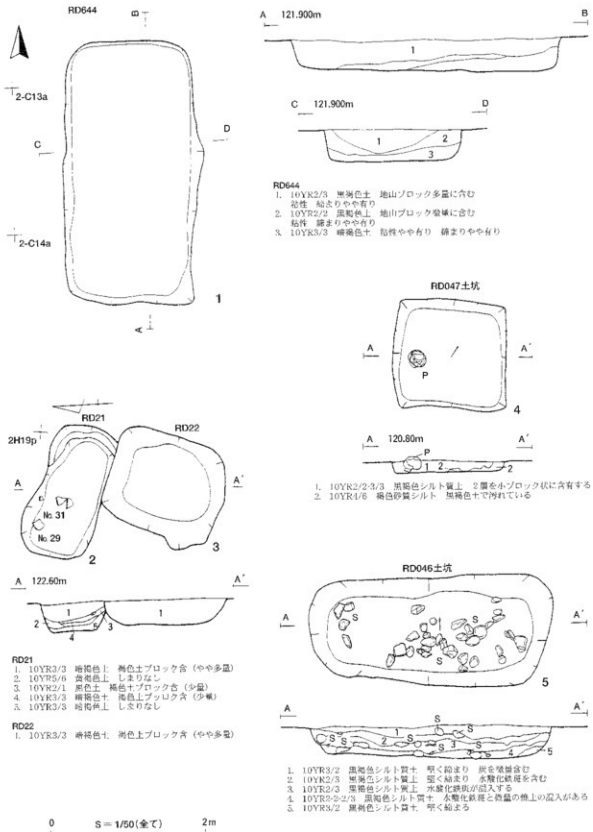
不整な形態の墓壙も存在する可能性もあるが、全国的にみて古代の土壙墓、木棺墓の形態は不整でないものが多い。埋土の自然、人為の堆積差は発掘調査で認識できない場合もあるが、ブロック土の混入によって判別できるものも多く認められる。最後の副葬品は、これを伴わない場合が想定されるため絶対的な条件にはなり得ない。しかし、底面に意図的に据え置かれた出土状況を示すものは副葬品である可能性が高いと考えられ、同時に墓壙である可能性も高くなると考えられる。以上のように若干主観的になる場合もあるが、これら３つの条件は「埋葬施設」として土壙を認定する場合の重要な条件と考えられる。

盛岡市の北上川より西側地域は、現在大規模な開発（いわゆる盛南開発）に伴い広大な面積を発掘調査中であり、古代集落の様子が次第に明確になりつつある。調査がおこなわれた代表的な古代の遺跡は本宮熊堂Ｂ遺跡、野古Ａ遺跡、小幡遺跡、台太郎遺跡、飯岡沢口遺跡、飯岡才川遺跡、細谷地遺跡などである。

これらの遺跡の調査結果から３つの条件を満たす平安時代の土壙と平安時代の墓壙と報告されているものを抽出した。

・**小幡遺跡（第２次）RE06竪穴状遺構** ……2.70ｍ×1.12ｍ・深さ30㎝程度の長方形、人為堆積埋土、底面付近で土器出土。

・**台太郎遺跡（第15次）RD047土坑** ……1.46ｍ×1.44ｍ・深さ15.2㎝の方形、地山ブロック土混じる埋土、底面より完形の須恵器壺（壷？）出土。**（第50図４）**



第50図　墓壙類例〈1.台太郎遺跡（第26次）・2.3.緑谷地遺跡（第4・5次）
〈4.5.台太郎遺跡（第13次）〉

・台太郎遺跡（第15次）RD046土坑 ……3.14ｍ×1.42ｍ・深さ44.5cmの長方形、礫を多く含む人為堆積埋土、底面より刀子出土。（第50図５）
・台太郎遺跡（第26次）RD644土坑 ……3.58ｍ×1.10ｍ・深さ48.3cmの長方形、人為堆積埋土、土師器など土器類出土、「墓壙か」と報告。（第50図１）
・細谷地遺跡（４・５次）RD21土坑 ……1.80ｍ×0.84ｍ・深さ35cmの長方形、人為堆積埋土、底面より完形の土師器坏出土。（第50図２）
・細谷地遺跡（４・５次）RD22土坑 ……1.50ｍ×1.32ｍ・深さ31cmの方形、人為堆積埋土、遺物の出土はなかったが墓壙と報告。（第50図３）

以上、盛南開発地域における平安時代墓壙の類例をいくつか挙げたが、これら以外にも一部の条件を満たさない土坑が存在する。例えば、遺物を欠くが同様の規模・形状・人為体積埋土などの近似する属性を有する土坑も多数存在する。このような土坑の中にはかなり高い確率で墓壙が含まれている可能性が考えられる。

3. 墓壙の特徴と意義

類例から得られた墓壙のデータからその特徴と傾向を導き出すと、位置、分布、規模、形態、埋土、底面の様子などにおいて特徴がみられる。これら墓壙の特徴は、当該期の居住域内に存在し、分布状況は密集せず散らばっている。平面形態は、長方形を呈するものと方形を呈するものの２種が認められる。規模は一定ではないが、埋土は地山のブロック土を含む人為的な堆積を示している。さらに、底面はほぼ平坦で、遺物が出土する例が多い。これらの特徴は今回調査した本宮熊堂Ｂ遺跡で検出したＲＤ159土坑にも当てはまる。

この墓壙は平面長方形、人為堆積の埋土、底面からは土師器坏が出土した。墓壙主軸は東西方向である。

以上の特徴から推定できる盛南地区の平安時代の墓壙について述べる。一般的に荼毘に付された人骨は比較的遺存し易いが、人骨が出土しないことを考えると、火葬ではなく土葬であった可能性が高い。これに関しては、墓壙の規模が成人の仰展葬が可能な長方形プランの墓壙の存在からも窺える。今回取り上げた墓壙内には、鉄釘が出土する例が存在しないことから鉄釘を用いた木棺を伴う葬ではなかったと考えられる。

このような事実からこれら墓壙は、土壙墓と呼んでも差し支えなさそうである。ちなみに、本宮熊堂Ｂ遺跡周辺では、飯岡沢田遺跡で平安時代の火葬人骨を納めた蔵骨器が出土しており、県内では珍しい平安時代の火葬墓である。

次に、平面形態において長方形、方形の２種が存在することが判明したが、両者の差異が何を示すのかは不明である。しかし、細谷地遺跡（４・５次）のＲＤ21土坑（長方形土壙）・ＲＤ22土坑（方形土壙）は互いに切り合い関係が認められ、長方形土壙は方形土壙によって切られている。少なくともこの１例は、長方形と方形の両者の間に時期差がありことが看取できる。

また、副葬品については土器類が多いようである。しかし、台太郎遺跡（第15次）ＲＤ046土坑では底面で刀子が出土している。副葬品にも身分差・性差・宗教差など様々な差が存在するのかもしれない。

最後に、これら墓壙は集落に近在、あるいは内部に存在し、群を成さない特徴がある。約600棟の竪穴住居が存在する台太郎遺跡においても墓壙は比較的少ない。

このことから、これまで抽出した土壙墓はごく一部の人々のものであると考えられる。

4. まとめ

木宮熊堂B遺跡で検出した平安時代の墓壙を足掛かりに周辺集落での墓壙を探ってみた。その結果、周辺の各平安時代集落内に当該期の墓壙が存在している可能性を示すことができた。これらの墓壙は集落内で点在しており、土葬で木棺などに埋葬されない土壙墓であった可能性が高い。墓壙は平面長方形のものと方形のものの2種類が存在し、何らかの差が存在すると考えられる。副葬品と思われる遺物を持つ墓壙も存在し、遺物の有無にも差が認められる。

今後、資料の抽出範囲を拡大し、この平安時代の土壙墓について多角的な視点で考えていきたいと思う。

（福島）

引用参考文献

－(財)岩手県文化振興事業団調査報告書－

・第244集 『小幅遺跡第2次発掘調査報告書』 1996

・第309集 『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』 1999

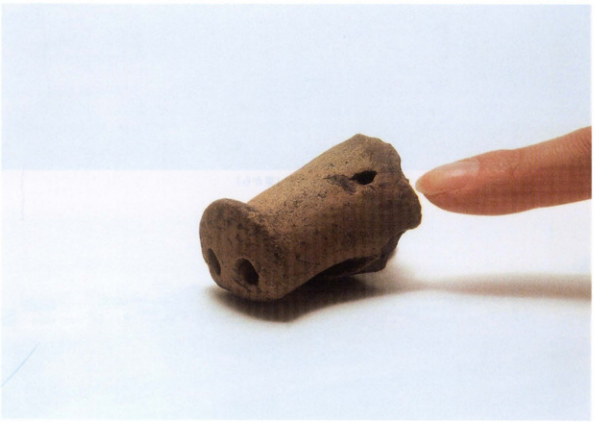
・第414集 『細谷地遺跡第4・5次発掘調査報告書』 2002

・第416集 『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書Ⅰ』 2002

－その他－

・『東日本における奈良・平安時代の墓制』 1995 東日本埋蔵文化財研究会

写 真 図 版



イノシシ形土製品（I区カクラン出土）

道路南側現況（東から）

道路北側現況（南から）

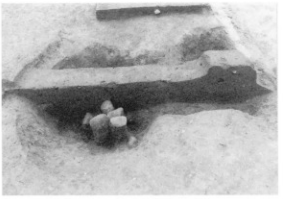
写真図版１　発掘調査前現況

西側調査区調査終了状況（北東から）

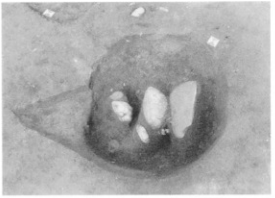
道路北側調査終了状況（南から）

写真図版2　全　景

RD162・RD163完掘（東から）

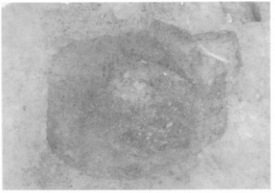


断　　面（東から）

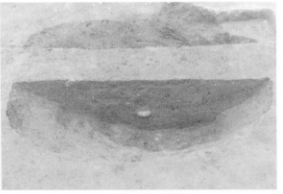


RD164完掘（南西から）

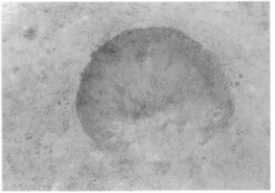
RD164完掘（南から）



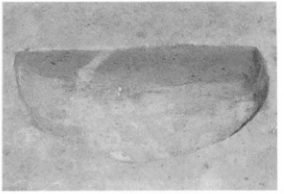
RD165完掘（南から）



RD165断面（南から）



RD166完掘（南から）

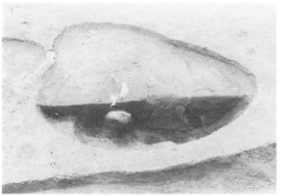


RD166断面（南から）

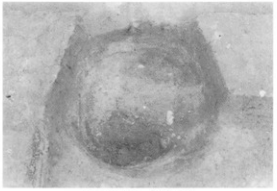
写真図版３　RD162～166土坑

RD168完掘（北から）

遺物出土状況（西から）



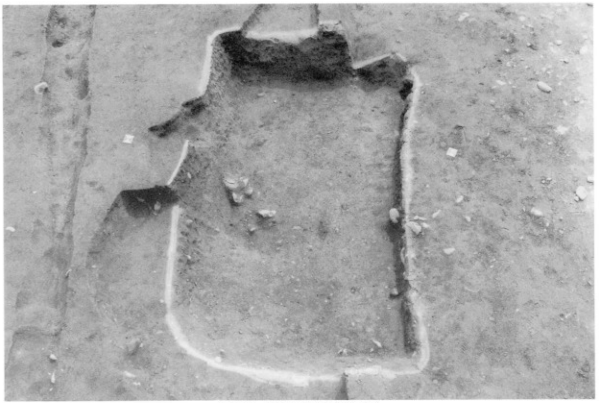
断　面（北から）



RD169完掘（西から）

RD169断面（西から）

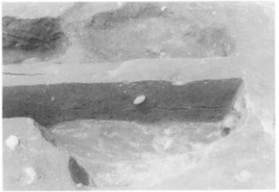
写真図版4　RD168・169土坑



RD159・RD160完掘（西から）

断　　面（北東から）

断 面 北（西から）

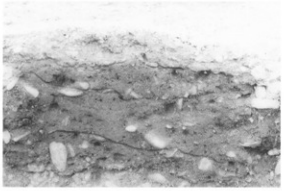


RD161断面（東から）

作業風景

写真図版5　RD159～161土坑

調査前近景（東から）



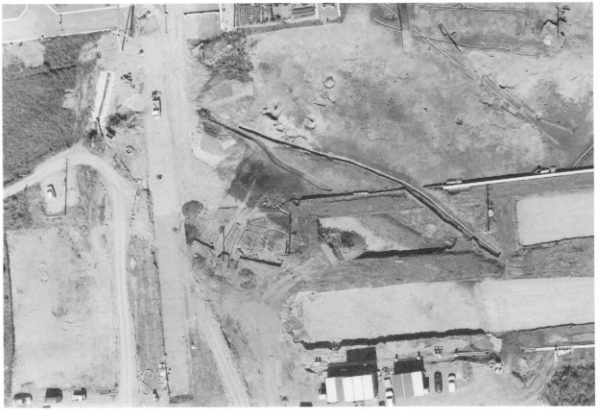
基本土層（北から）

調査風景（東から）

調査風景（南西から）

調査風景（南から）

写真図版６　Ⅱ区調査前現況・調査風景



空中写真（西から）

遺跡近景（北から）

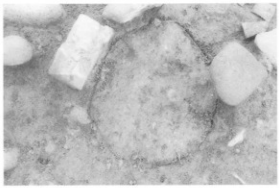
写真図版７　Ⅱ区全景

RA081 全景（東から）

埋土断面（東から）

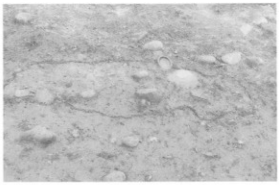
埋土断面（南から）

写真図版 8　RA081 竪穴住居跡



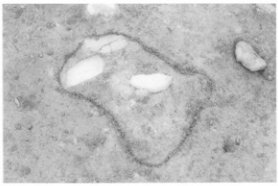
焼土平面（東から）

焼土断面（南から）



焼土平面（南から）

焼土断面（南から）



焼土平面（西から）

焼土断面（南東から）

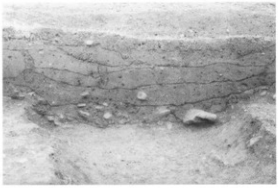
調査風景（南から）

調査風景（北から）

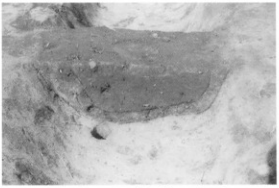
写真図版9　RA081竪穴住居跡

RG097（南から）

RG098（西から）

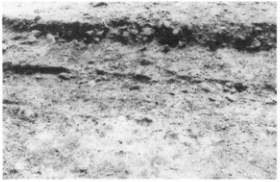


RG097埋土土部断面（北から）



RG098埋土断面（東から）

RG097埋土下部断面（南から）



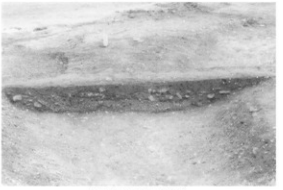
RG097溝内小流路跡（東から）

写真図版10　RG097・098溝跡（Ⅱ区）

完　掘（南から）

完　掘（西から）

埋土上部断面（北から）

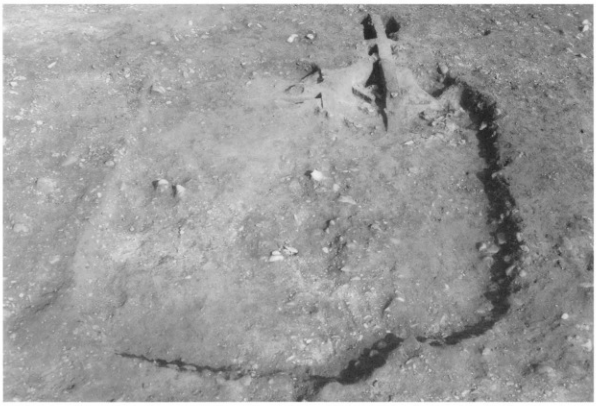


埋土断面（南から）

埋土下部断面（南から）

調査区南端追加分検出状況（南から）

写真図版11　RG098溝跡（Ⅱ区）



完　掘（西から）

断　面（南から）

断　面（西から）

写真図版12　RA069竪穴住居跡

カマド（西から）

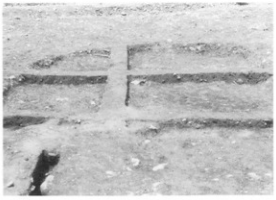
カマド遺物出土状況（西から）

カマド補断面（西から）

煙道断面（北から）

煙道断面

遺物出土状況



住居断面（東から）

遺物出土状況

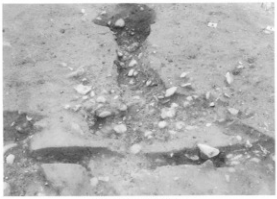
写真図版13　RA069竪穴住居跡

全　景（南から）

断　面（東から）

断　面（南から）

写真図版14　RA070竪穴住居跡



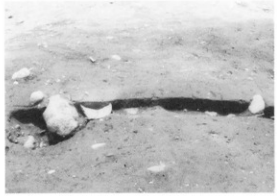
北カマド（南から）

北カマド断面（南から）

北カマド煙道断面（西から）

北カマド煙道断面（南から）

東カマド煙道（西から）



東カマド煙道断面（北から）

東カマド煙土断面（西から）

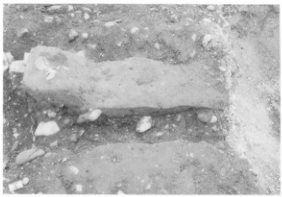
作業風景

写真図版15　RA070竪穴住居跡

全　景（西から）

断　面（東から）

カマド袖　遺物出土状況



カマド袖断面（西から）

写真図版16　RA071竪穴住居跡

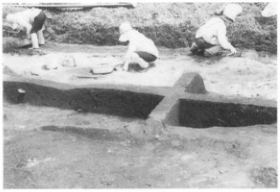
RG097全景（北から）

RG097断面（南から）

RG097底面

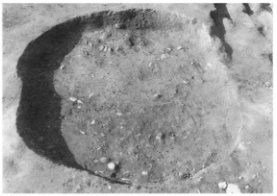
RG098全景（北から）

RG098断面（南から）



作業風景

写真図版17　RG097・098溝跡（Ⅲ区）

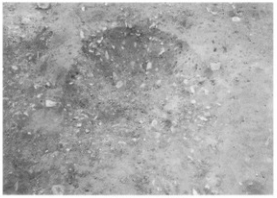


RD167（南から）

RD167断面（南から）

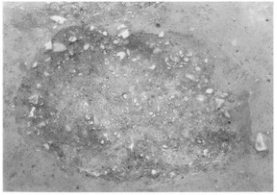
RD170（北西から）

RD170断面（西から）



RD176（南東から）

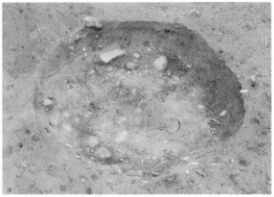
RD176断面（南東から）



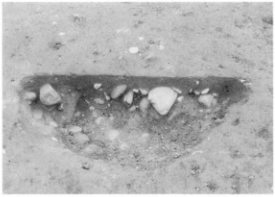
RD177（南から）

RD177断面（南から）

写真図版18　RD167・170・176・177土坑



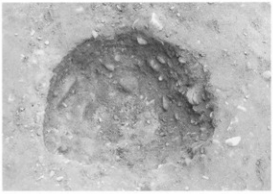
RD178（南から）



RD178断面（南から）

RD179（東から）

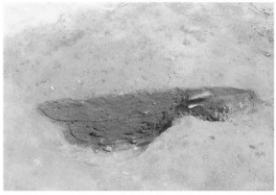
RD179断面（東から）



RD180（南東から）

RD180断面（南東から）

RD181（南から）



RD181断面（南から）

写真図版19　RD178～181土坑

全　景

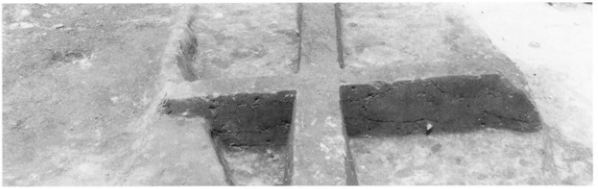
断　面（北から）

断　面（北東から）

写真図版20　RA072・073竪穴住居跡

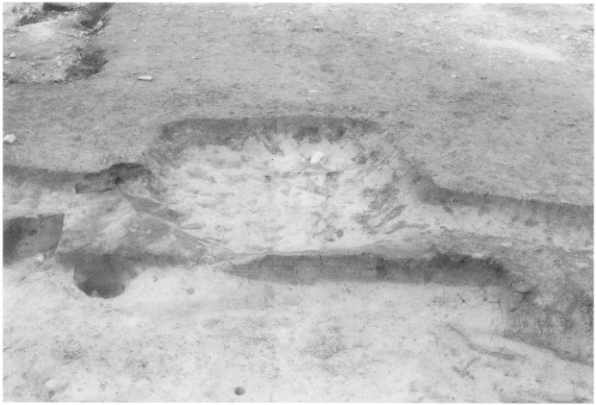
全　景（北から）

断　面（南から）



断　面（東から）

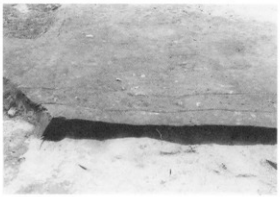
写真図版21　RE012竪穴住居状遺構



全　景（北から）

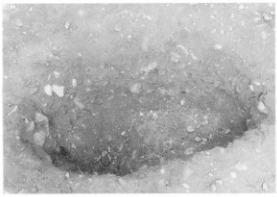
断　面（西から）

礫出土状況（北から）



検出状況（北から）

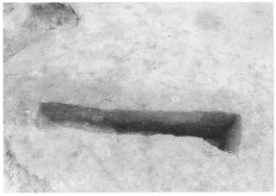
写真図版22　RE013竪穴住居状遺構



RD182（南西から）

RD182断面（南西から）

RD184　断面（西から）



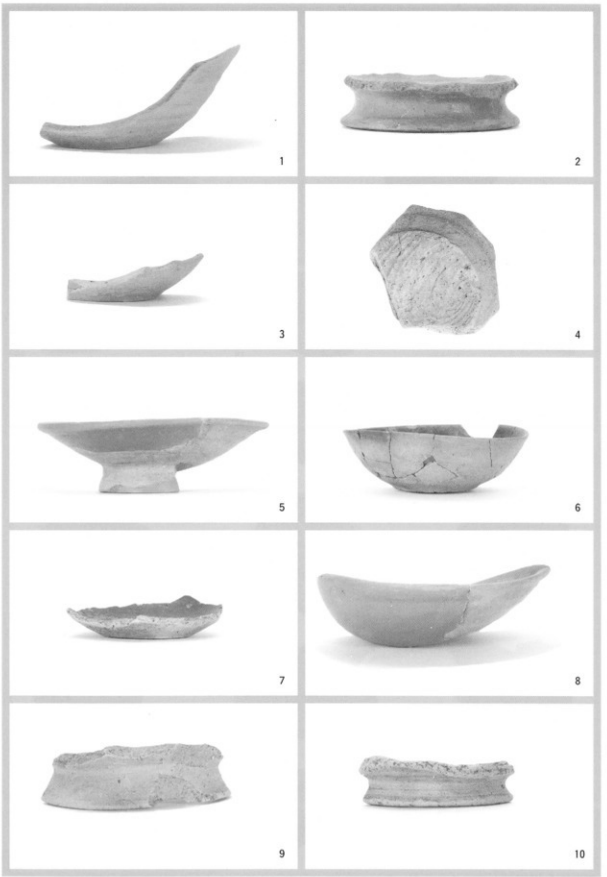
RZ014断面（南から）

Ⅰ区土坑群（東から）

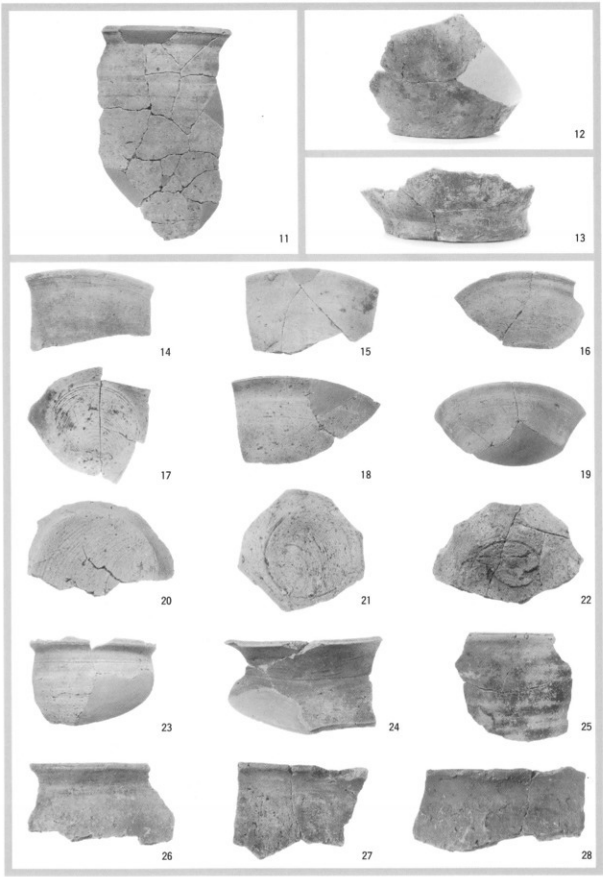
Ⅰ区削平部分（北から）

Ⅰ区全景（東から）

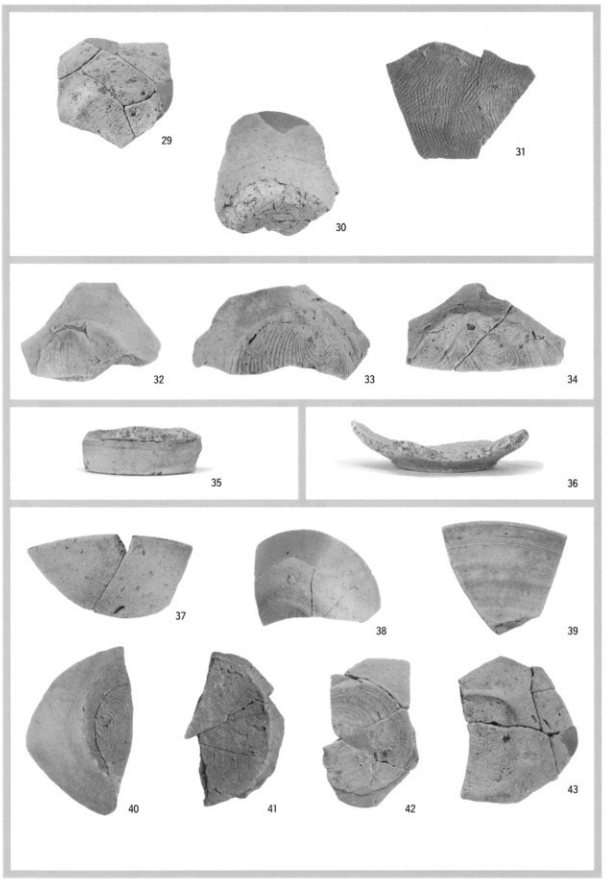
写真図版23　RD182・184土坑、RZ014性格不明遺構



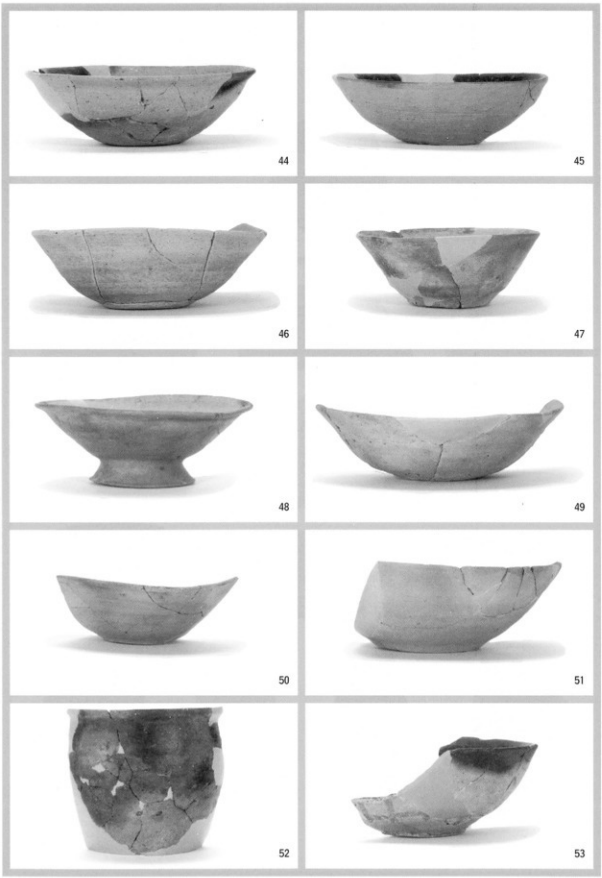
写真図版24　RA081



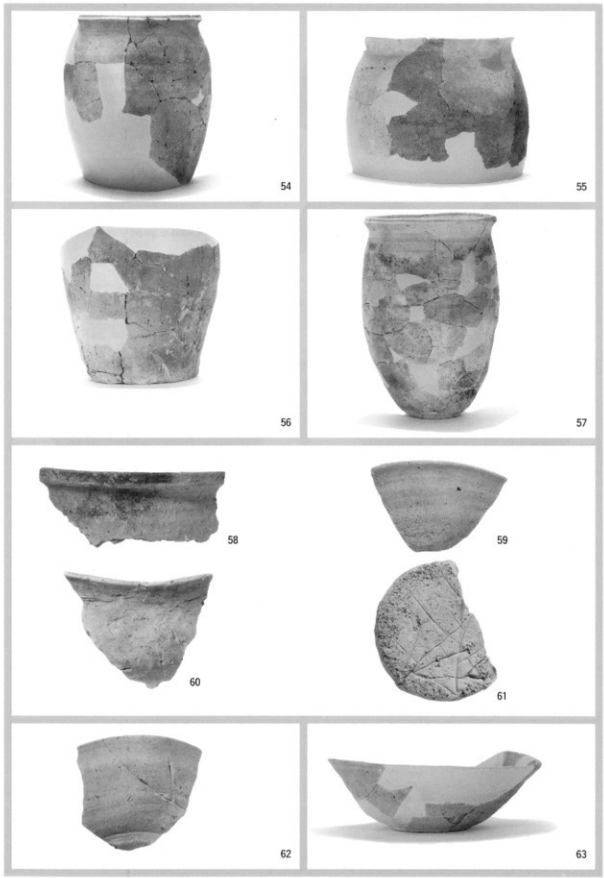
写真図版24　RA081



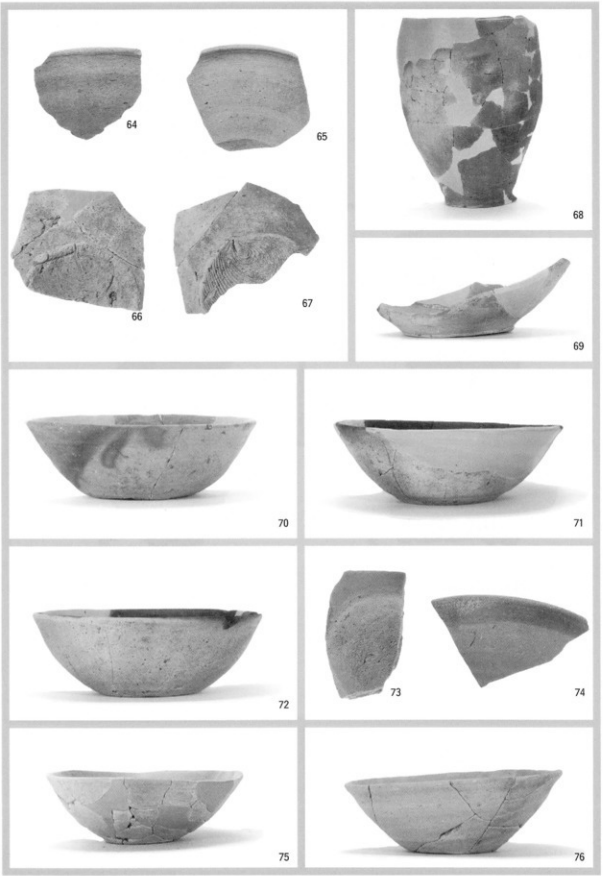
写真図版24　RA081　RG097・RG098



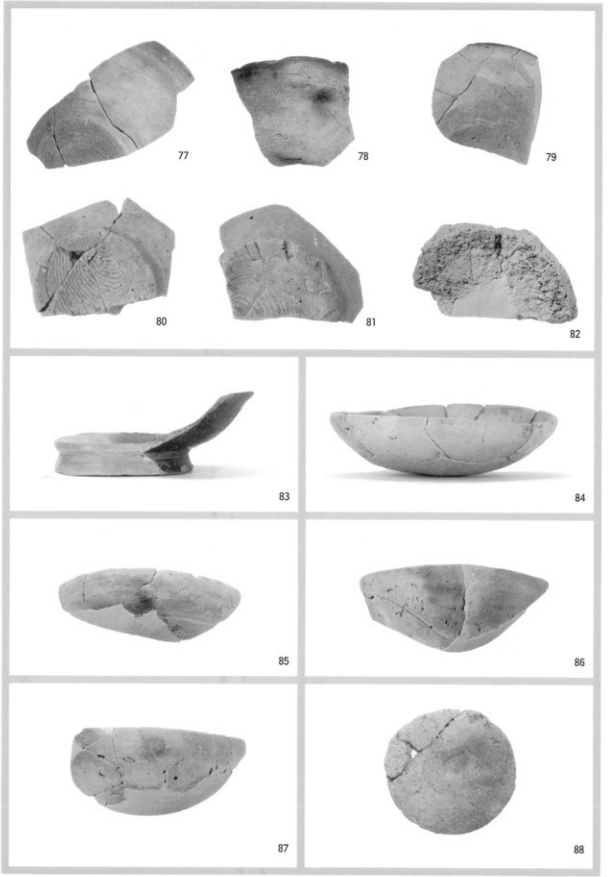
写真図版25　RA069 ①



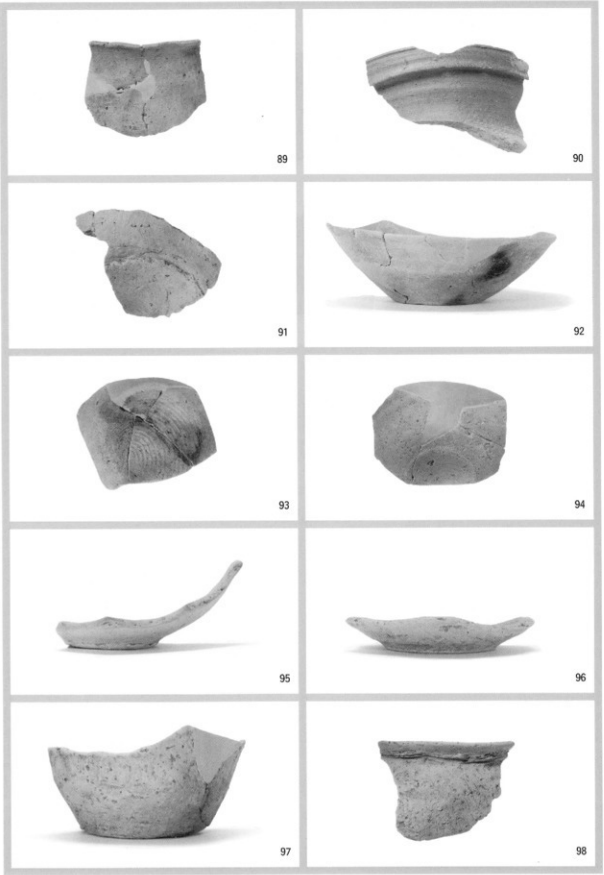
写真図版26　RA069②・RA070



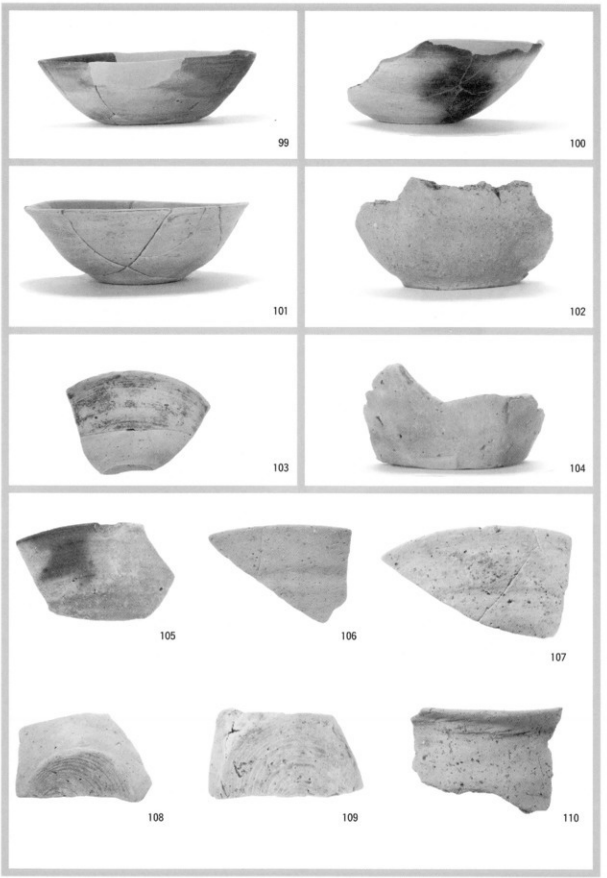
写真図版27　RA070・RA071　RG097・RG098



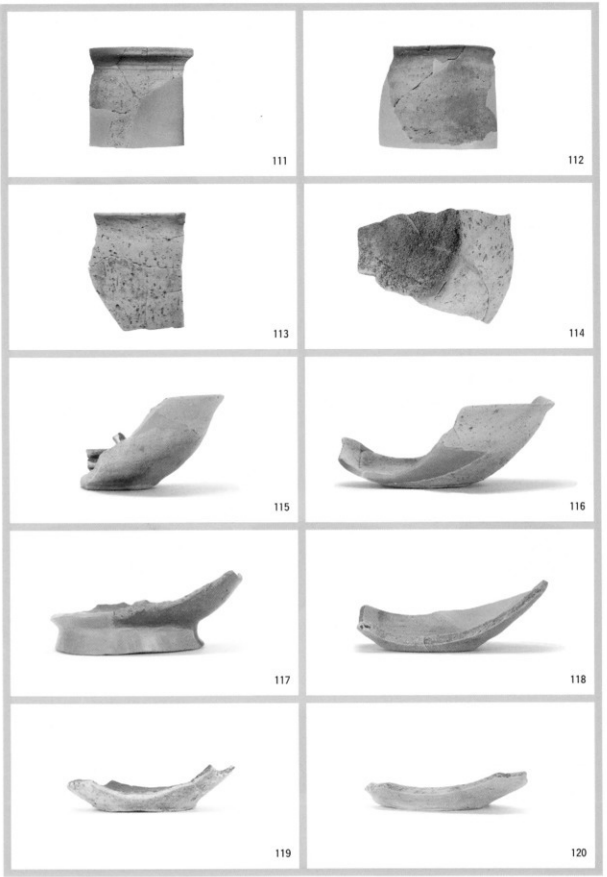
写真図版28　RG097・RG098　RD180　RA072・RA073



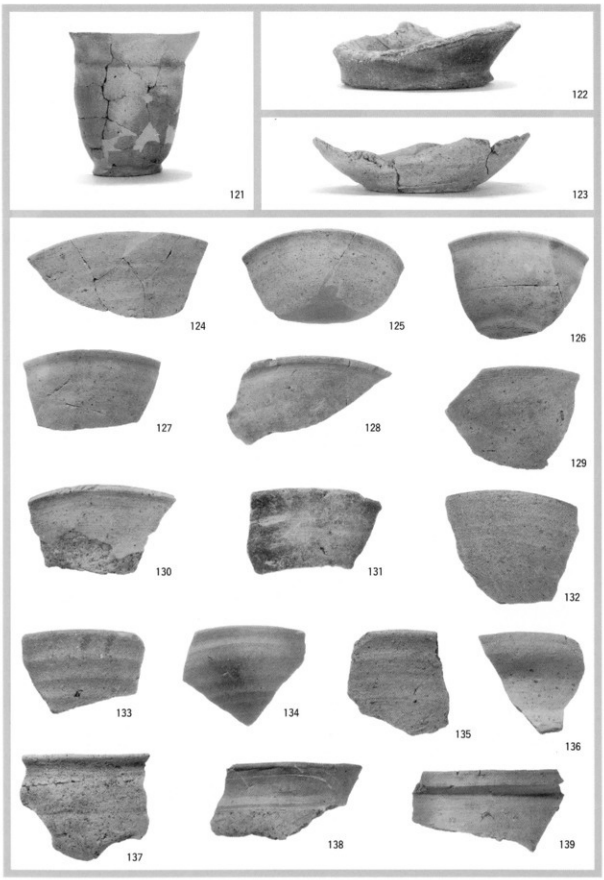
写真図版29　RA072・RA073　RE012・RE013　RD183



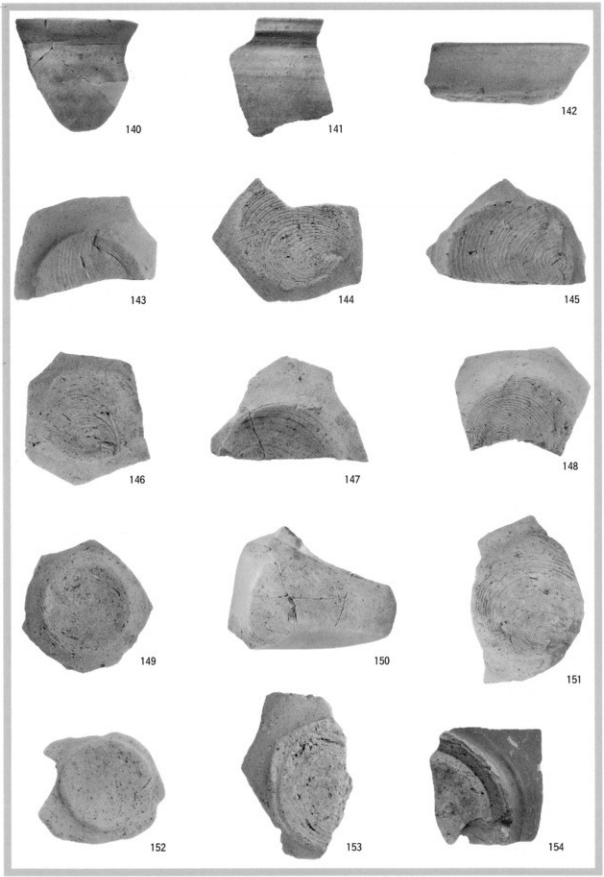
写真図版30　RD184～RD186　RZ014



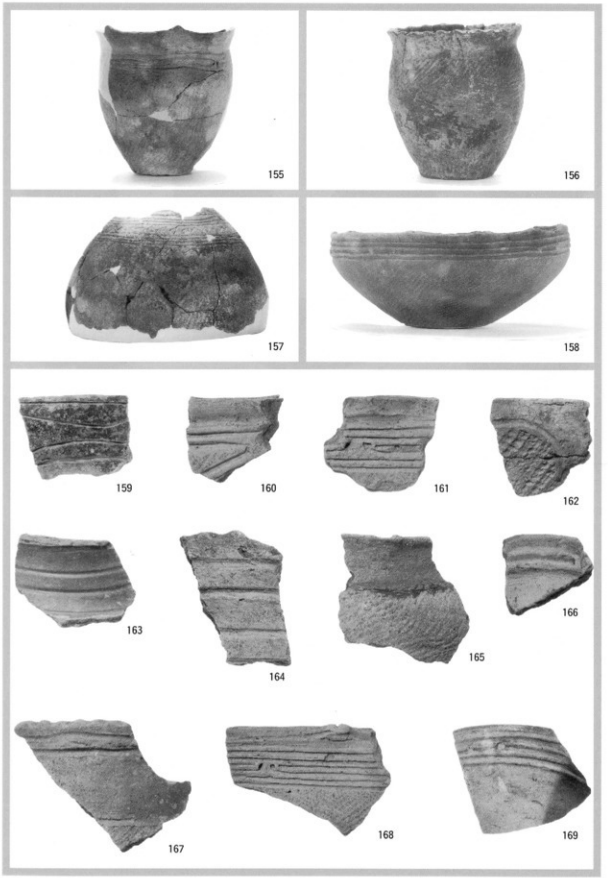
写真図版31　RD184～RD186　RZ014　遺構外


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139

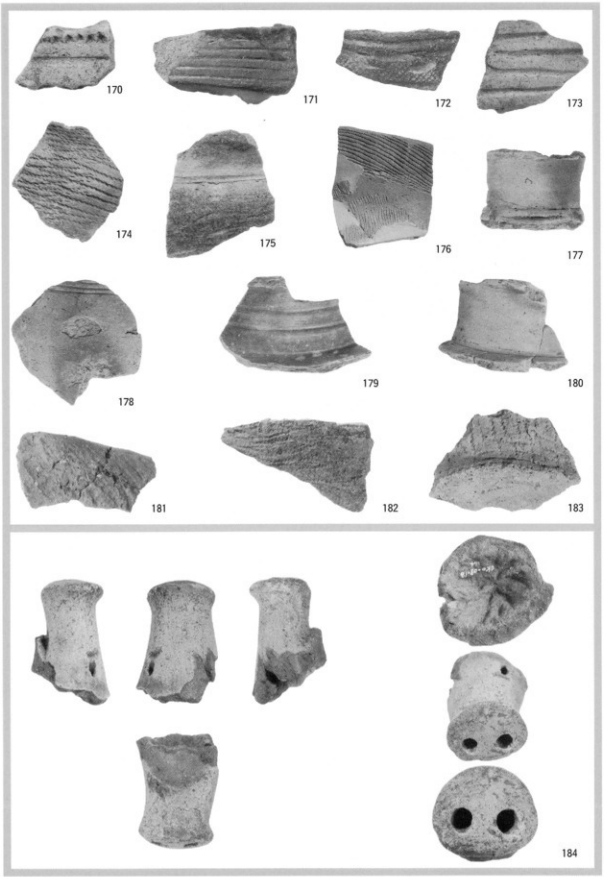
写真図版32　遺構外



写真図版33　遺構外



写真図版34　古代以前



写真図版35　古代以前

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうびーいせきだいじゅうはちじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	本宮熊堂B遺跡第18次発掘調査報告書
副書名	国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第458集
編著者名	福島正和・吉田 充
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL019－638－9001・9002
発行年月日	西暦2005年2月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
本宮熊堂B遺跡 第18次調査	盛岡市本宮字 熊堂45 1ほか	03201	LE16-2118	39度 40分 37秒 世界測地系	141度 08分 17秒	2003.04.11 ～ 2003.06.30 2003.09.18 ～ 2003.10.08	5,118㎡	盛岡西バイパス建設工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本宮熊堂B遺跡 第18次調査	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	竪穴住居 7棟 土坑 24基 溝跡 6条	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器	縄文時代晩期～古代の複合集落遺跡

平成16年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長　柏原康二

〔管理課〕

課長　韮澤正吾
課長補佐　小山烏宏道
主任主査　中嶋賢一
主事　猿橋幸子

〔調査第一課〕

課長　三浦謙一
課長補佐　高橋義介
文化財専門員　金子昭彦
文化財調査員　水上則博
〃　阿部勝則
〃　杉沢昭太郎
（御之御所支援派遣）
〃　瀧浩二郎
〃　村上拓
〃　戸根貴之
〃　八木勝枝
〃　丸山浩治
〃　米田寛
〃　北田勲
〃　島原弘征
〃　村田淳
期限付調査員　石崎高臣
〃　立花裕
〃　菅野情
〃　新井田えり子

副所長　平野允茴

嘱託　高橋清助
〃　常泉治美
〃　伊藤滋子

〔調査第二課〕

課長　佐々木清文
主幹兼課長補佐　中川重紀
文化財専門員　小山内透
〃　（県教委研修派遣）
〃　金子佐知子
〃　濱田宏
〃　羽柴直人
文化財調査員　吉田充
〃　阿部徳幸
〃　早坂淳
〃　小松則也
〃　悳岩伸吉
〃　亀澤盛行
〃　鈴木裕明
〃　新妻伸也
〃　林勲
〃　黒雅之
〃　西澤正晴
〃　丸山直美
〃　村本敬
〃　福島正和
〃　北村忠昭
〃　須原拓
〃　川又言
〃　中村絵美
期限付調査員　小針大志
（6月退職）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第458集

本宮熊堂B遺跡第18次発掘調査報告書

国道46号盛岡西バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成17年２月10日
発行　平成17年２月15日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話(019)638-9001
FAX(019)638-8563
印刷　株式会社　長内印刷
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ三丁目3-28
電　話(019)643-5343

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2005